
た俺が女体化した友人とゲームの世界で奴隷(+ 幼女)ハーレムと一緒にオワタ式で冒険しに逝く

低学歴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生でチートと化した俺が女体化した友人とゲームの世界で奴隷（＋幼女）ハーレムと一緒にオワタ式で冒険しに逝くけど質問ある？

【Nコード】

N0941BA

【作者名】

低学歴

【あらすじ】

ちゃんとしたMMO物だと思って読むと後悔します。

あと、真面目に書いていません。表現の使いまわしなどがあり、非常にセリフだらけです。

小説じゃなくて台本だろこんなもん！と発作が現れる方はブラウザバックをポチッとな。

15禁くらいのエロ要素（という名の下ネタ）を含みます。半分開らいレズです。そういうのに抵抗がある人もバック。

ある日、ゲームしていると俺と友人は死んでしまった！

馬鹿みたいな話だが事実だ。

転生先のゲーム世界では、破壊神の女の子を倒すと幼女になり、奴隷を買えば、俺が一撃で死ぬと分かると素で接してきやがる。

ハーレムなのかハーレムじゃないのか、レズプレイをやりだす奴がいたり、主人である俺が尻に敷かれるというのはどういうことだ！？

現在のメンバー。

オワタ式の俺。女体化友人。ツンデレお姫様。クーデレ剣士。眼帯付けたゴスロリ。破壊神という名の幼女。

体感ゲーム始めました（冷やし中華始めました的なニュアンスで）

まずはタイトルについて触れようか。

うん、そうなんだ。

これはテンプレを詰め込みすぎて、いったい何がしたいのかわからなくなった……

いわば、神々の遊び？ という奴なんだ。

いまさら謝って許してもらおうとは思っていない。

けれど、君はこのタイトルを見た時、こう「ヤリスギ」みたいな物を感じたと思うんだ。

一撃で死んでしまうという荒んだ世界で生きていく主人公を見ていても、その気持ちを忘れないでほしい。

じゃあ、まずは質問を聞こうか。

……。

超立体感型ゲーム「俺の勇者がこんなになめらかに動くわけがない」を購入した、俺「北田広太」と、友達「長谷圭吾」。

二つのダンボールが、パンパンに膨れているのを見て、俺たちは顔がほころんだ。

「なあ、広太。これ、どういう風に動くんだろうな？」

いつもは冷静な圭吾が、足踏みしながら訊ねてくる。

もちろん、俺もバタバタと足踏みしながら答える。

「きまってんだろ。あれだよ、あれ、ナメクジ？」

「なめらかどころのレベルじゃねーよ!!」

的確なツツコミに満足して、俺は早速ダンボールを開けた。開けたと同時に、ゲームがドサツと盛り上がり、溢れてくる。隣に目を向けると、圭吾の方はすでに腕に手袋をハメていた。それにならい、俺も着けていく。

足は、長靴を素足で履かされたような感触の靴下だった。その上に更に靴を履く。

それだけで、狭い部屋の中をバック転するほど興奮していた。もちろん出来るはずもないので、床に頭から激突してもんどりうつていたが。

圭吾は、そんな俺に冷ややかな視線を送りつつも、頭に取り付ける装置みたいなのをかぶった。

頭の三倍はありそうな大きさに、丸いフォルム、真っ黒なデザインが光る物だった。

「パソコンに繋がればいいのか？」

首が折れるんじゃないか、と考えてしまうほどデカい装置をかぶりながら、圭吾は言った。

俺はそれに頷く。

「なあ、どうなんだ？」

更に圭吾が言ってきた。
しつこい。

また首を縦に落とす。

「いや答えるよ!!」

「だから頷いてんだろ!？」

「見えるわけねーことぐらい想像しとけよ!!」

「だったら千里眼ぐらい持っとけ!!」

「無茶言つなよ!？」

宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶった男と、頭にタ
ンコブを付け、手足に変な手袋足袋を履いている男が喧嘩するとい
う、かなりシュールな光景になっていた。

とりあえず、俺も宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶ
る。

「おい」

圭吾が、少し苛立った声で言った。

「なに?」

「ちよつと、パソコンに繋げてくんね?」

「あー、俺もかぶってるから無理」

「なんでだよ!? ええ、なんでかぶってんのお前まで!？」

「いやあ、小さい頃の夢が飛行機のパイロットでさ」

「全然関係ないだろ!!」

「こつという服装に憧れてたんだよねえ」

「お前、全世界のパイロットに謝ってこいよ!!」

「じゃあ……行こうか、ハネムーン」

「ツッコミきれねえよ!!」

「あ、分かんない? ハネムーン、^{ムーン}月。で、今宇宙飛行士の格好み
たいじゃん?」

「分からなくもないけど一旦黙ろつか……?」

さんざん圭吾を小馬鹿にしたところで、ようやくヘルメットを脱
いだ。

俺は清々しい顔をして、窓から見える青空を覗く。

「……やっと帰ってきた。俺の故郷、地球」

「さっさとしろ馬鹿!!」

そろそろ圭吾が、ヘルメットをかぶったまま殴りかかってきそうなので、パソコンを立ち上げた。

正直、後ろでデカくて真っ黒なヘルメットをかぶった男がうるちよろしているというのは、かなり不安だ。

というか、不審者だ。

外から家の中を簡単に覗ける構造になっていたら、今頃警察が来ているところだろう。

二代のパソコンに、付属のケーブルを差してゲームと繋げる。

更に、自分たちに着けている手袋などから伸びているコードも繋げて、準備完了だ。

「起動、つと」

「うほっ！」

圭吾が、なにやら気持ちの悪い声をあげた。

さっそく俺もヘルメットを着けてみる。

あれ、なんにも見えない。

「圭吾、なんにも見えないんだけど、これどうなってんの」

「おま、逆だろソレ」

「あっ」

クルッ、とヘルメットを180度回転させると、目を細めてしま
うほど眩しい光が俺の視界を射た。

目が慣れてくると、目の前にはゲーム画面が広がっていた。

タイトルが浮かんできて、下に制作日時などが細かく書かれている。

グラフィックも細かく綺麗で、完全にリアル世界だった。

「うほおおおお！」

歓喜の声をあげる。

隣から「キモッ」という言葉が聞こえた気がするが、気のせいだ。手を上げてみると、ゲーム画面にCG化された俺の腕が出現して、動いている。

「おお！」

次に足を上げてみると、これもゲーム画面に出てきた。

「おお！」

スタート、と書かれた部分をCG化された指でタッチすると、セーブデータを確認する画面へと映り変わる。

「おおおお！！！」

「うっせえ黙れ！！！」

友人の怒号に絶句しつつも、その臨場感に俺はドップリとはまり込んでいた。

新規データをタッチ。

すると、男のキャラクターが上半身裸、下半身はブリーフ一枚で現れた。

名前欄には「無職のプー」と書かれている。

「なんでプー!？」

「無職ってなんだよ！ 明らかにゲーム買った奴に喧嘩売ってんじやねーか!！」

俺たちは健全な男子大学生です。

「圭吾、お前キャラクターどうすんの？」

顔メイクなどをいろいろいじりながら、聞いてみた。

「ああ、女の子にするけど？」

「止めとけて……。声でどうせバレるんだから」

そう。これは音声対応だ。

やり方によつては、上手く声を無くし、チャットのみも出来るが、ネカマ防止用ということで普通では外せない……らしい。説明書に書いてた。

……説明書の最後のページに「女の子だと思ってたらオッサンだった。絶対に許さない許さない許さない」と、呪詛よろしく書き連ねられていたのは目の錯覚だろう。

「決めたか？」

「おう、決めた」

「サーバーどうする？」

「んー、2の3にしようぜ」

「キャラの名前は？ こっちは『圭子ちゃん』だけど
「うわぁ」

「なにその反応」

「大丈夫。引かないよ、俺は」

「分かったから。んでお前、名前は？」

「『暗黒より深淵を覗き闇に身を委ね光を求めながらも避ける強き力を持ちながらも弱い心を持つ孤高の狩人ワールドデスライドアームズ』

「痛い！！ 中高と部活に入ってたクセに、いきなり作詞作曲をやりだして、自分ボーカルで他のメンバー募集してる奴並みに痛い！！」

「相当じゃねーか！」

あんまりすぎる例えにツツコミながらも、俺はゲームを始めた。

フューチャークエスト

現れた我が分身は、とてつもなく格好良かった。

髪型はFFのクラ。ドみただし、服装はアーク。ラッド3の主人公みたいだ。

今、俺は自分のステータス画面を見ながら、ひたすらに自分の格好良さに酔いしれていた。

「よっ」

馴染みのある声が聞こえ、ステータス画面を閉じ、辺りを見回す。後ろに振り返ると、美少女が立っていた。

髪はポニーテールに結んでいて、茶色という無難な形。顔もなかなか好きなグラフィックで、ドキリとした。

「どうした？」

あ、声キモい。

「なにがキモいだ！ お前も全く似てねえじゃねえか！」

「いや、これが俺の真の姿さ」

「ゲームでしか表現できない真の姿に泣け」

「おいおいおい」

「やっぱ止める」

「はい」

さすがに、この姿で泣いているというのかなり情けない。

格好良すぎて、むしろダサイ。

街の中へ入る道の途中、圭吾のキャラクター「圭子ちゃん」が話

しかけてきた。

「お前見つけるの、めちゃくちゃ簡単だったわ」

「あ、やっぱり似てるから？」

「んなわけねーだろ！ その長ったらしい名前を見る！」

確かに、俺の名前はかなり長い。

三人称視点に戻すと、名前が画面端まで届いていて、全部読めなくなっている。

「なんて呼べばいいの？ お前のこと」

「暗黒より（ゝ中略ゝ）スライダーアームズだからあ、『セイントセイバー』って呼んでくれ！」

「なんで暗闇の戦士のあだ名がセイントセイバー！？ 真逆だよ、それ！？」

「固いこと気にすんなよ。『敬遠する神にも少なからず情を持ちトドメを刺さなかったために奈落へと突き落とされ神に復讐を誓う男ちゃん』」

「なっげえ！！ 長いうえに、違和感ありすぎだわ！ なんで無理やり『ちゃん』付けたの！？」

「いやあ、可愛らしさも必要かな、と思って」

「これっぽっちも可愛くねえよ！！」

などと楽しく談笑していると、見るからに受け付けですーな場所に着いた。

カウンターごしに微笑むお姉さんに、俺はウィンクしつつ、

「今夜、君の受け付けに俺を入れさ」

「それ以上は止める」

「はい」

圭子ちゃんに首根っこを鷲掴みにされ、しぶしぶ引き下がった。
しかし受け付けのお姉さんは、やはりCPUらしく、嫌な顔一つ
せずに言う。

「ギルドへと加入なさりますか？」

「あ、はい」

圭子ちゃんが受け答えしている。

「なら、こちらにサインしてください」

「はあい」

スラスラつと圭子ちゃんが紙に文字を書き終わると、お姉さんが、

「では、説明をいたします」

省きます。

「フューチャークエストを楽しんでいてくださいね！」

彼女に笑顔で見送られ、俺たちはその場を後にした。

……。

「で、まずはクエストを受けるわけだが」

相変わらず、顔に似合わない男声で圭子が話す。

掲示板には、ザッ、と多数のクエストが貼られていた。
どれも初心者向けの物しかない。

「どうする？」

かわいい顔を傾げさせて訊いてくる。
もちろん、

「寝る」

「なんでだよ!？」

「いや、セーブのやり方ってクエストがあるからさ」

「あ、ああ」

俺が指差すと、ようやく圭子は理解したらしく、苦い顔をしながらも頷いていた。

内容は、ただ寝るだけ。寝ることで、セーブと回復を完了すれば
オーケーという、比較的簡単なものだ。

「で、寝る場所どこよ」

圭子がステータス画面を開いたらしく、彼女の体が、まるで時間が止まったように固まり、そしてうつすらと青くなった。

地図を開いているのだろう。

「圭子ちゃん、もしかして寝るって……俺と？」

「なんで恥ずかしそうに言うんだよ! 気持ち悪いわ! 違うからね? 寝るって意味、全く違うからね!？」

「うん……分かってる。圭子ちゃんが、素直じゃないことぐらい……」

「なんで女の子キャラのオレより女々しくなってるの!？」 顔グラ

イケメンだから、余計にキモいわ!!」

「うん……初めてだから……ね？」

「声ちよつと高くすんな」

「うい、分かりやした」

「今度は声低くすんな！　楽し。ごかお前は!？」

「ハブ注入」

「なんつーもん注入してんじゃボケ!!」

ポカッと頭を殴られて、少しばかりHPが^{ヒットポイント}減ってしまった。
フレンドリーファイアありかよ……。

説明しよう！

フレンドリーファイアとは、いわゆる仲間に対して攻撃をあてることである！

よくFPSなんかにフレンドリーファイアがあるが、友達とやるならともかく、不特定多数の人とやる時はオフにしておこう！

正味、仲間から攻撃されて死ぬなんて、無様以外の何者でもないしな！

「さてと、んじゃ寝ますか」

「優しくしてね……？」

「黙れカス」

2LDKの住まいを、俺と圭子は手に入れた！

ダブルベッドに寝転がる。

男キャラである俺は、よくいびきをかいていた。

逆に、女キャラである圭子は全くいびきをかかず、丸まって眠っていた。

俺はガバツと起き上がる。

「襲ったらリアルで殺す」

圭子から聞こえたドスの利いた声で、俺はパタリとベッドに倒れた。

しかし、眠れない。

「二度寝できないみたいなんだけど」
「知るか」

もうクエストクリアなのだが、いかんせんHPが全然回復していない。

圭子はドンドンとスタミナを回復していく。
ふと、思いついたことを言ってみる。

「おっぱい揉ん」

「寝ろ」

「あいとういまでん」

また倒れる。

あと十秒で、圭子は起きる。

「ねえ、揉むくらい」

「殺す」

残り五秒。

「あっち向いてホイ、しょうか」
「ブチコロス」

だんだん、圭子の声に抑揚が無くなってきた。
残り……二秒！

ムラムラ……ムラムラ……ムラムラ……。

「今じゃあー！」

「失せる犯罪者ー！」

俺が圭子に襲いかかると同時に、彼女は『寝る』を完了しており、起きていた。

彼女は伸ばしていた俺の腕を掴み、そのまま投げとばす。

「うげっー！」

俺は壁に激突し、大の字になったままスルスルと落下した。
圭子がパンパンと両手を叩く。

「ふん、だてにメタ。ギア3はやりこんでねえよ。見よう見まね、CCCだゴルア」

「い、いつの間にそんな技を……」

またHPが減った。

そろそろ危ない気がする。

「そろそろ行くぞ、犯罪者」

「こういう体力の時……どういふボケすればいいか分からないの」
「死ねばいいと思うよ」

につこりと、残酷に微笑む圭子に引つ張られ、住居を出た。

……。

ふと、住居を出た俺たちは、路地裏から声がするのを聞いていた。発声源に近づくと、なにやら顔グラがイケメンの二人が、小声で話をしている。

「ドユフ……ち、チート使って……さ、さっさとクリアしようず」
「オブフォ……そうでござるな……フヒヒ」

圭子よろしく、顔に似合わない脂ぎったような声を聞いた瞬間、鳥肌が立った。

「……おい、犯罪者」
「……なんだよネカマ」

さすがにずっと犯罪者呼ばわりされると、反抗意識も湧く。
圭子から歯をこすらせたような、怒りを必死に我慢しているような音がした。

「……いいか、運営にこのことを知らせるんだ。あいつらのIDと名前は覚えたか？」

「……ああ、アニメキャラの名前だから、簡単に覚えられたぜ」
「なら、行くぞ」

と、きびすを返して走り出すと、

圭子が無もない場所ですっころんだ。

「うごふぉ!？」

なんとも似つかわしくない悲鳴をあげて、ゴロゴロと転がっている。

その悲鳴に気づき、先ほどのイケメン二人がこちらを振り向いた。

「見たなコイツら！」

ぎこちない走り方で迫ってくる。

吹き出しそうになるが、なんとかこらえて、圭子を立ち上げさせた。

「大丈夫か!？」

「……すまない、しくじった」

それにしても、

「ふっほっふっほっ」

「はぁ……はぁ……ヒュー」

……あいつら、おっせえなあ。

俺たちはすぐに走り出し、一気に距離を空ける。

余裕だ。全然余裕だった。

あいつらはとっくに見えなくなっていた。

「はは、ざまあみ」

言葉の途中で、俺の意識が途絶えた。

はい死んだ今君の気持ち死んだよ

ふと気がつくと、一面が真っ白な空間に立っていた。
いや、真っ白だけではない。

バナラのように、ほんの少し黄色がかった白だ。
足元……地面が、雲みたいにフワフワしている。

「あ、あつれえ？ おつかしいぞお」

頭の上に、なんか輪っかみたいなのが浮いてるし、心なしが俺の
体も浮いてるような……。
つつか、ここどこだ？

「はい、次の人」

「ぬおっ！？」

いきなり、俺の立っている地面が動き出した。動く歩道みたいだ。
ウィーンと機械音を響かせつつ、どんどん前へと進んでいく。
すると、目の前に、なにやら椅子に腰掛けた爺さんがいた。

「えーっと。死人ナンバー9865の……北田広太さんね」

ガタンと、俺の足場が止まった。

次に、隣からウィーンと音がする。

「あれ、広太？」

呼ばれ、振り向くと長谷圭吾（現実の姿）が、動く歩道でこちら
へと近づいてきていた。

そして、俺の隣でガタンと止まる。

「君ら、あれだよ」

爺さんが、すごく面倒くさそうに話す。

「ゲームやりすぎるのも別に構わないけどね。ハシヤギすぎるのも問題だよ?」

「あ、すみません」

反射的に謝ってしまった。

「死因が大型トラックとの衝突。しかも二人同時に。なんか変なヘルメット着けてたから頭大丈夫だったけど、首が、もうバッキバキに折れてんだから」

「は? 死因?」

「あ? なに言ってるの。死んだじゃん、君ら」

「えっ? ええええええええええええ! ?」

「まあね、いつの間にか死んでる人って、みんなそういう顔するから。もう慣れたし。……ああくつそ閻魔の野郎、なんで俺が死人裁かなくちゃいけないんだよ死ね。……なにが人が多いだよ、息子は息子で大変なことやらかすしよお。……死ねよカスくそ」

「あ、あのう」

あまりにも陰悪なムードなのだが、おずおずと聞いてみる。

「あなたは、誰なんですか?」

「……ウス」

「へ?」

「神々の王ゼウスだよ悪いかよ!!」

「ええええええええ!!」

いきなりゼウスが立ち上がった。

あの爺さん、ブリーフしか履いてないんだけど。
無職のブーさんそっくりなんですけど。

「王なのにパシられてんだよ悪いかよ!! 俺もさ、ゲームやってたの! なめ勇を!!」

どんな略し方だよ。

「なのにさ、閻魔の野郎がさ。『ゼウスちゃん、手伝って』とか言うからさ。いいんだよ? 別に。可愛いからさ、うん。女の子の頼みは極力断んない主義だから。

でもさ! おかしくね? もう一万人近く相手にしてんだけどさ、暇ないんだよ! 閻魔の野郎、悠々とアイス食ってんの、分かる!? チューパット吸ってんだよ!?

普通、アイツから奢るパターンだよな? なのにさあ、あの野郎口リ顔でへらへら笑いやがってさあ」

突然、ゼウスが自分の座ってた椅子の背もたれを殴りだした。

壁パンならぬ椅子パンかよ。

「うっぜー、マジうっぜー。仕事できない奴の肩代わりとか、マジうっぜーわ。

わざわざ来てやってさ。一発やらせてくれるとか言うからさ。最近妻とレスってるから、マジ溜まってんだよ。

仕事終わらないしさ。いつみわっかんね、いつみわっかんね。も

うね、俺が社員ならストライキしてるわ。死ねよブラック企業。天国なんてブラック企業に就職しなけりや良かったわめっちゃ偉いとこまで行ってもコレだよ。結局、誰かに足蹴にされんだよ。もう死のうかな。死んじゃおうかな。人生マジ疲れたわ、いやマジで」

おいおい、なんか関係ないことまで愚痴りだしたぞ。

なんか、死のうの下りから、チラっチラこっち見てくるし。言っ
てほしいの？ そんなことないって？

「そ、そんなことないですよ」

圭吾が、朗らかスマイルで慰めに入った。

「今だけ頑張りましょうよ。退職する時に、精一杯周りをバカにすればいいじゃないですか。

老後のために、息子さんのために、奥さんのために、まずこらえてみせましょうよ」

さすが我が友人。きれい事を言わせたら右に出る者はいないな。
ゼウスが、ちよっと目を潤ませながら俺たちに向き直った。

「分かったよ、うん。ちよっとぐらいなら頑張れるし。別にお前に感化されたわけじゃねえし」

反抗期の中学生ぐらい情けないな、この王様。

「じゃあ、天国か地獄、どっち行くか言うよ、うん」

涙声になりながら、ゼウスが喋ろうとしていると、ゼウスの背後

からスーツ姿の、頭にツノの生えた男が走ってきた。

男はゼウスの横で足を止める。

「ぜ、ゼウス様！」

「ちよつ、決心したのになんだよ。うぜ、まじKYうぜー」

「……ぶち殺したるか糞じじい」

「はい聞こえてましたー、小声俺には聞こえてましたからー。死ぬのはテメエだ糞ガキ！」

「働きもしねえで何言って……違う違う。緊急の連絡があるんです！」

「は？」

男が、胸元から紙を取り出し、ゼウスに見せる。

しかし読ませる間もなく、男は話し出した。

「天国と地獄が一杯なんです！ とりあえず、今は裁かないでおいてください」

「は？ 帰りたいんだけど」

「すみません。それまで、待機ということ」

「はい無理ー。もう我慢できないから。帰るし」

「帰らないでください！」

ゼウスが拗ねて、男が服を引っ張って、なんとか引き止めようとしている。

「や、やめろよー！ もう俺帰るし。なにが閻魔だよ。なにが裁きだよ。知るか、全部地獄に落ちとけ」

「そう言わず！ 今だけ、死人を好きな場所に転生させていいですから」

は？ あの糞ガキ何言っちゃっててくれんの？

「まじいいの？」

「はい」

え？ マジですんの？ ちょっと待って。

またゼウスが、元いた椅子に座る。

「確か、君ら『なめ勇』やってたんだよね？」

「はあ、そつすね」

「んじゃ、そのゲームに転生してくんない？ その、不細工」

「誰が不細工だー！！」

ゼウスが、生ゴミでも見るような目で見てきて、ついボケずにツッコんでしまった。

「君、その世界で最強の力あげるからさ。いてくんない？」

「え？」

「好き放題できるよ？」

MP無限だし、勇者のスキルは全部習得してるし。あと、魔法も全部覚えてるよ」

「マジっすか！？」

「うん、別にゲームの歴史変わろうと知ったこっちゃないしね。

あと、その……ネカマ」

「的確だがやめろ！」

ゼウスが顎をしゃくって、圭吾を差す。

「女キャラ使ってたじゃん。あのキャラの容姿で転生させてあげるよ」

「い、いや別にオレは」

「大丈夫大丈夫。チ。コは取つとくし、声も可愛くしとくからさ」

「あの、オレは」

「はい決定！ んじゃ、転生させるよ」

バカッ、と俺と圭吾の足場が開いた。

「「え？」」

下を見ると、真つ暗な奈落が広がっている。

ふつと浮遊感が俺を包んだ。

「あ、言い忘れてた」

ゼウスが、俺が落ちる寸前に思いついたように言い出した。

「不細工の方は『一発でもダメージ受けたら死ぬ』から、気をつけ
てね」

「ちよつと待つ。先に言ええええええええええ……」

文句をつける前に、俺は底なしの奈落へと落ちていった。

ダンスの角に足の小指ぶつけたら死ぬ程度の体力

「ん……ああ？」

目が覚めると、青空が視界いっぱいに広がっていた。

種類も分らない鳥が群れをなして飛んでいく。ときおり聞こえる鳴き声は、俺のいた世界の動物には出せない音だった。

体を起こすと、平原のはるか先に山が連なっているのが見えた。

こちらは俺のいた世界と同じ、森林に覆われて、深緑に染まっていた。

どこか違う。

異世界？

「うう……ん……」

呻くような声で、首を横に向ける。

そこには、雑草の布団の上で丸まって眠る美少女がいた。

顔は鼻が整っていて、日本人を基調としていながらも、西洋風の顔も見せる不思議な顔だった。

髪型はふんわりとした印象を持つポニーテールで、茶色に少し黒が混じっている色をしている。

服装はかなり軽装だ。上は白いシャツ一枚で、肩までしか無い。

膨らんだ胸が、腕を通す穴のから覗ける。下はジーンズパンツだ。

すやすやと、心地よさそうに寝息をたてる彼女を見ていて、ふと俺は気づいた。

「圭吾のキャラにそっくりじゃね？」

そっくり、というよりそのままだ。

始めた時の圭吾のキャラはC G色が強かったため、この美少女と似ているということに気づくまでに時間がかった。だが、目の前の美少女は、あの姿を更に鮮明にしたようでもある。

とにかく、まずは起こしてみて確認しないことには確証は得ない。

「あの〜」

肩を掴んで、出来るだけ優しく揺する。

すると、美少女は目をうつすらと開けて、両手で目をゴシゴシと拭きだした。

「なに、どうしたんだ広太」

「あ、やっぱり圭吾か……」

この喋り方は間違いなく圭吾だ。だてに長年友人をやってはいない。

しかし、声はとても高く、女の子そのものだった。アニメ声、という表現の方が合っているだろう。

圭吾は起き上がり、一つ大きなあくびをすると、目を半開きにしつつ、こちらを見た。

と思ったら、吹き出した。

「な、なに？ お前の格好、キモッ！ アーハハハ！」

「よく自分の姿を確認してから言おうか」

「え？」

俺の親切的な注意に、圭吾はやっと自分に起きたことに気づいたらしい。

一度自分の膨らんだ胸に目線を落としたあと、何度か胸を揉んだ。シャツが胸のシルエットを映し出していて、妙にエロい。

「お、女になってる？」

「そつだよ。顔も美少女と来てる」

「は、はは。何かの、間違いだろ？」

「なら鏡探してこいよ。いろいろ捗るぞ」

「鏡探すまで捗ってないけどな」

覇気のないツツコミをしていても、まだ圭吾は自分の胸を揉んでいる。

さすがに、俺もドン引きしていた。

「そんなにおっぱい揉むのが楽しいか？」

「ちげえよ。シリコンが入ってるなら、偽物かどうか感触で分かるから確かめてんの」

「ほう？ お前、本物のおっぱい触ったことあんの？」

「いいや、シリコンのおっぱいなら」

自然に出た圭吾の言葉に、二人して俯いた。

そつだ。モテない男がおっぱいを揉む経験なんかあるわけがない……。

だが、美少女と化した友人で、思いついたことがある。

「そつか！ コイツがゲームキャラの姿なら、俺も」

「お前は現実世界の不細工顔だよ」

「シット！！」

ものの数秒で幻想が打ち砕かれた。

数分間、友人がひたすらに胸を揉み続けるのを見つめているという苦行に耐えていると、圭吾が深くため息をついた。

「残念だが、本物らしい。痛覚まである」

「気持ちよくなってきた？」

「エロアニメの見過ぎだ」

「お前もそうだろう」

「オレは女の子になったからな。もう女の子の気持ち分かるのさ」

「なに言ってるんのキモい。生涯休まず生理痛になればいいのに」

「おい止める。妹の生理痛を見たことあるが、あれ、もう喋れなくなるレベルだからな」

「ほう？」

「ずっとトイレから喘ぎ声が聞こえるって、聞いている側からしたら結構つらいぞ」

「録音は？」

「してねえよ」

俺の変態発言に、圭吾の可愛らしい顔が睨んできく。

そこまで怖い顔ではないため、睨まれてもどうということはない。むしろ、微笑ましいくらいだ。

「そろそろ出発しよう」

と言って、圭吾が立ち上がった。

その行動に俺は首を傾げる。

「どこに？」

「泊まれるところを探すんだよ。野宿ってわけにもいかんだろ」
「それもそうだな」

俺も立ち上がり、うんと伸びをする。

体の節々が固くなっていて、動かすとパキパキと音が鳴った。筋肉が伸縮する感触が気持ちいい。

辺りを見回すと、山の無い地平線の真ん中に、小さな柵で囲まれている町が見えた。いくつか鉄でできた家があるのが見え、そこそこ発展しているのがうかがえる。

「ん、圭……吾？ あそこでいいだろ？」

「ん？ なんで名前を言いづらそうにするんだ」

別人にしか見えないからだよ。

「性別変わって、顔も美少女になってるからさ。圭吾って、なんか呼ぶのはおかしい気がする」

「おいおい、ゲームじゃないんだから」

「でも違和感バリバリなんだよ、どうにかしてくれ」

「分かったよ。圭子って呼べばいい」

「いいの？」

「気を使われるのは嫌だしな」

「ありがとう圭子ちゃん！」

圭子の胸に飛び込もうとすると、顔面を掴まれた。

「はい、なんででしょう？」

指の間から視認できる圭子の、笑っているとも怒っているともつかない般若の形相に、俺は縮みあがった。

「なんでもありません」

「よろしい」

圭子の手から開放された。

「まあ、天国が空くまでの辛抱だから頑張ろうぜ。なっ？」

機嫌よく、圭子が俺の背中を叩いた。

広太は死んでしまった！

「なんでだああああああああああ！！」

「カンオケに変わってんぞ、お前！」

うねうねと体を曲げると、言われた通り、体がカンオケに変わっていた。

ぴょんぴょん跳ねて叫ぶ。

「どうすんだよ、コレ！！」

「戦闘には参加できないけど、一応意識は生きてるんだな……」

縦に立って、跳ねまわるカンオケという図が出来上がってしまった。

軽く化け物だ。

「とにかく、復活させてもらわないと！」

「そのままでもいいだろ」

「良くねえよ！？」

「死んだような生活してたくせに」

「今は関係ないね！ 俺の冒険はいつだって晴れ時々大荒れ、いいね、いい冒険だよ」

「どっかの名パイロットのセリフを改変すんな」

「圭子お、今何キロお！？ 体重的な意味で」

「ステータスでも開けりゃ分かるんだろけどさ」

「あ、そこは普通に返事するんですか」

「おっ」

圭子がわたたと手を四方八方に振っていると、彼女の目の前に何かの画面が現れた。

「出るのかよ!!」

なぜ出ているのかも分からない画面を彼女は力チ力チのタッチしている。

「あつた。四十キロぐらいだつて」

「ぐらいつて、テキトーだなおい」

「もういいか？」

「最後に一つ。スリーサイズは？」

「書いてない」

「うっわつつまんね……」

「露骨に残念がるなよ……」

（目に見えないが）俺は肩を落としつつ、歩を進める。

まだ、モンスターはいないようだ。見渡す限りの平原は、草花がユラユラと風になびいているだけ。

「ステータス開きながら歩くと危ないぞ」

俺の言葉が聞こえていないのか、圭子はずっと画面から目を離さない。

「おい、閉じとけつて」

「どうせ何も無いんだから、大丈夫だろ」

「はぁ、そうかい……」

俺ことカンオケがため息をついた。
何が心配かって。カンオケのまま町に入ることが一番の心配だった。

町に着いたらすでに世界の危機

復活の泉が、なぜかフィールド場に放置されていたので、俺は復活しました。」

町の看板に、ものすごく不穏な文字が書かれていた。

「世界滅亡の危機です。どうか力を貸してください」

は？

「これ、どういうこと？」

「ゲームのストーリーじゃない？」

二人してウンウン唸っていてもラチが開かず、そのまま町の中に入っていく。

中央に行けば行くほど、騒ぎ声が聞こえてくる。
人が集まっているようだ。

「はい、では次の方へ」

マイクに当てた声がした。
ん？

「なにあれ」

「漫才か？」

人ごみの真ん中のステージに、二人の男が立っており、間に挟むようにマイクが立ててある。

「でね、僕、見たんですわ」

「ほお、なにを？」

「恐竜ドゴドゴドン」

「逃げな！そこは逃げとこか！？」

「ですな、それを僕が食いました」

「どうやって食うてんな！」

「あ、食われたんでした」

「じゃあなんで生きとんねん！もうやってられませんか」

「「どうも、ありがとうございました」」

え？

世界の危機なのに、なんで漫才やってんの？

「次は、このお二人です」

司会らしき人物が、次の二人組みを呼び出す。

「おい、どういうことだよ」

「とにかく、行ってみようぜ」

人ごみに駆け込み、話しかけやすそうなお兄さんの肩を叩く。

「あの、これって何してるんですか？」

「これ？これね、世界の危機を救おうとしてるんだよ」

「？」

「あの、審査員席の女の子がいるだろ？」

お兄さんが指差す先には、ムスツとした表情の女の子が座っていた。

可愛い顔をしているというのに、眉間にシワを寄らせて、漫才を見ても笑っていない。

「あの子ね、世界を破滅に追いやる破壊神なんだよ」

「破壊神!？」

「んでね、彼女を倒す方法はただ一つ、笑わせることだけなんだ」

「どうして!？」

「古代の書物に書いてたらしいよ。なんとか他の方法で倒そうとしたけど、太陽に送っても死ななかつたんだってさ」

「ええ……」

むちゃくちゃだ。

「彼女を倒すほど笑わせられた勇者は、賞金9999億ゴールド貰えるんだってさ、すごいよね」

「金カンストかよ……」

「おい」

圭子が俺の腕に肘うちをした。

「参加しようぜ」

「やだよ、恥ずかしい」

「いいから、行くぞ!」

彼女は俺の腕を掴み、人ごみをかき分けて、受付らしき場所に連れて行く。

受付のお兄さんが、こちらを見る。

「参加するのかい？」

「はい」

「じゃあ、次に出てくれ」

もう誰も出ないらしく、ステージの横に列は無かった。
すぐにステージに立っている二人が終わり、俺たちの番になる。
緊張でガクガク震えていると、圭子が耳に口を近づけてきた。

「まず、お前が登れ」

「ええ！？ やだよ……」

「いいから。オレに作戦があるんだ」

司会が次の組を呼んだので、もう自暴自棄になりつつもステージに駆け上がる。

「きつ、北田広太です！ よ、よろし」

「ブツ、アハハハハハハ！！ ふぐほう」

俺がステージに上がって挨拶していると、破壊神が突然笑いだし、血を吐いた。

「なんでだよ！」

「だって、だってブツサイク……ごはっ、ぶふっ、ヒィーヒヒヒヒ！！
ハァーハッハッハ！！ フォカヌボウ」

破壊神は俺の顔を指差して、口から血を吐き散らしながら腹を抱えて爆笑している。

「もう、死ぬ！！ 笑い死ぬ！！ アーハハハ……ガクッ」

さんざん顔を見て笑ったあと、破壊神が力なくうなだれた。

「優勝は、北田広太選手です!!」

司会が俺の腕を持ち、高々と掲げる。

一斉に歓声が沸き起こった。

どうやら、俺の顔で笑い死んだらしい。

「胸くそ悪いわ!!」

ステージから飛び降り、審査員席へと走る。

そして破壊神の胸ぐらを掴んで、その可愛らしい顔を何度もひっぱたく。

「起きろ!! 謝れ!! 俺に謝れ!! くそっ、これだから三次

元女は嫌いなんだ!!」

号泣しつつ何度も殴り続けると、破壊神のまぶたがかすかに動いた。

「生きてんのか!? おい!？」

「う、うるさいよぉ……もう少し寝かせ……ブッ、アーハッハッハハハハハハハ!!」

生き返ったと思ったら、また笑いだした。

「あ、やべっ、力が、力が抜けるううう……」

などと呟いたあと、破壊神の体がドンドンと小さくなっていった。胸も何もなくなり、最終的に、小学校ぐらいの身長になる。

「ヤバい、破壊神のちからなくなっちった」
「え？」

合わなくなった服から破壊神がボロツと脱げて、地面に落っこちた。

「どうしてくれんのよう！」

「は、破壊神が……ロリに……」

「せきにんとりなさいよう！」

幼女になった破壊神が、ワーキヤー騒いでいる。

裸で。

気がついて、すぐ服を破壊神に投げる。

「あぷっ」

「来いよア。ネエエエエエス！！健全少年育成法なんか捨てて
かかってこい！！」

「うるさいわよう」

耳をおさえていた破壊神だが、ブルツと体を震わせると、腕を胸の前で組んだ。

「さむいわよう。ふくが、ほしいわよう」

「人の顔見て笑ったんだから、それぐらい我慢しろ」

「かお……？ ぷっ、キャハハハハッ！」

また笑いだした。

「おもしろいわよう！」

「そうかよう……」

なんだか悲しくなってきた。

「あの、君」

「はい？」

声がかけれ振り向くと、村長らしい風貌の爺さんが立っていた。

「君キミ、破壊神を引き取ってくれんかね」

「ええ……」

「どうやら力も消えたようじゃし、安心じゃから」

「いやですけど」

「そうか、よく言ってくれた。彼女の分のゴールドも」

「ちよちよ、ちよつと！」

「ん？ なにかな」

「なにかな、じゃねーよ！ いやだっつってんでしょ！？」

「こんな器の広い方は初めてじゃ。ありがとう。あそこの袋に賞金が入っているから、取ってくるといい」

「都合の悪いとこだけ聞き流してんじゃねーよ！」

とにかく、賞金の袋を持って、圭子の手を引っ張って逃げようとする。

「まちなさいよう！」

ズボンが掴まれ、ゆっくりと後ろを振り返る。

「わたしもつれていきなさいよう」

「いやだよ、子供嫌いだし」

「こどもじゃないわよう！ おとなだよー！」

「だって子供じゃん」

「ちからがなくなっただけなのよう」

「とりあえず、裸のまま掴むのは止めろ」

「いいじゃないのよう」

「俺の隣で欲情している奴を見ても言えるか？」

チラッ、と横目で確認すると、圭子がハアハアと息を荒くし、今にも破壊神につかみかからんとしていた。

その獣に、破壊神をピクツと驚く。

「や、やっぱりふくをきるわよう」

「そうしてくれると助かる」

ロリの次は奴隷が仲間になるのか……（前書き）

もう真面目に書くのは完全に止めた

ロリの次は奴隷が仲間になるのか……

「かわいいわよう！」

破壊神が、ミニス力を履いて嬉しそうに飛び回っていた。
俺の横で、圭子が息を荒げている。

「はあ……可愛い破壊神ちゃん……抱きしめてペロペロしたい」
「おまわりさんこいつです」

さすがに犯罪の臭いがしてきたので、警察を呼ぼうと動く。
破壊神が俺の腕にしがみついていた。

「えへへ、こつたはやさしいわよう！」

童貞なら勘違いするセリフを言ったあと、俺の顔を見上げて、

「キャハハ！」

と、また腹を抱えて笑い始めた。
そんなに面白いのか。俺の顔は。

「いいなあ、広太だけ……」

よだれを垂らしてこちらを見る圭子の顔面を殴り飛ばしたあと、
破壊神を腕から離す。

「そういうことしてると、変な奴に襲われても知らねえぞ」
「だいじょぶだわよう！」

「ほんとか？」

「ほんとだよ」

「信用できん」

「しんよーしてよう。かわりに、いいことおしえるわよう」

「いいこと？」

「どれーをかえるおみせがあるのよう」

「奴隷！？」

「そうよう。さっきもらったしよーきんで、どれーをかつたらどうなのよう」

「マジか……」

半信半疑だが、破壊神から店の場所を教えてもらい、その店に行く。

入ったら、板前みたいな格好のオヤジが出迎えてきた。

「へいらっしやい！ 新鮮な奴隷が入っとりやすぜい！」

ここまで違和感があると、どんな反応をすればいいか困るな。

「とりあえず、いろいろ見せてください」

「はいよ！ こちらですぜ」

奴隷商人とは思えないほど威勢のいいオヤジに連れられ、店の奥へと入っていく。

いかにもな、場所に着いた。

壁はなく、代わりに牢屋の鉄格子ばかりが見える。

「たくさんいやがるでしょう？ これだけの上玉の中から好きに選

んでくだせえ」

「じゃあ……」

「あ、この子良くね？」

いきなり圭子が割ってはいってきた。

そして、一つの鉄格子に顔を近づける。

「なんで奴隷を見て、そんなにテンション高いの？」

「いやいや、この子はマジだって、だってほら」

中を覗くと、青い髪の子が座っていた。

目がややつり上がり、気の強そうな印象を受ける顔だ。

胸もかなり大きくて、ボロボロの服から肌が透けてみえる。

「オレ、この子とイチャイチャしたいんだけど」

「お前、今女なんだって分かって言ってるか？」

「百合いいね」

「見る方の気持ちにもなってほしいよ……」

「見るのかよー！」

「当たり前だろ。美少女同士の百合プレイだぞ？　そうそう見れるもんじゃない」

「親友であるオレを、お前はそういう目で見るか」

「いかにも」

胸を張って答えると、圭子は深くため息をついた。

「分かった、好きにしろよ……。んじゃ、この子を貰うよ」

「まいどありー！」

オヤジが鉄格子を開けて、手早く首輪を女の子にハメる。

そこから伸びる鎖を圭子が持たされた。

「1万ゴールドになります」

「はいはい」

多分、大金なんだろうけど、全く痛手じゃなかった。

「こうた、こっちくるわよう！」

幼女に呼ばれて、駆け寄る。

破壊神が、鉄格子の中を指差している。

「かつこいいわよう！」

「かつこいい？」

意味が分からずに覗くと、片目に眼帯を付けた女の子がいた。
黒い髪が腰まで伸びている。

体は全体的に細めで、簡単に折れてしまいそうだ。胸はない。ぺ
たんこだ。

「……かつこいい、ね」

つまり、眼帯を付けている、ということがかつこいいのだろう。
中二センスくさいが、オヤジを呼ぶ。

「この子を」

「へい、1万ゴールドになります」

「え？ もしかして、全員1万ゴールドだったりします？」

「違いますよ。あそこの鉄格子は100万ゴールドです」

オヤジが顔を向けた先を見る。

そこには、赤茶けたかなり長い髪をいじる女の子が閉じ込められていた。

「あれは、王族の血筋でしてね。まあ、魔法に特化してんですけど。戦闘では、いいアタッカーになりますぜ」

「はあ、なるほど」

オヤジに1万ゴールドを渡し、その女の子の鉄格子へと近づく。腰を落とし、目線を合わせると、彼女はプイツとそっぽを向いた。

「あもう、こちら振り向いてくれませんか？」

「いや……」

女の子は呟いた。

「どうせ、奴隷なんか買う奴にロクな奴はいないわ。なら、死んだ方がマシよ」

「確かにロクでもないな」

圭子が笑いながら言うが、気にせずオヤジを呼ぶ。

「買つよ」

「へい、100万ゴールドです」

「はい」

手渡すと、オヤジが鉄格子を開け、中の女の子に首輪を付けた。

「これで、これはあなたの物です」

鎖と、首輪の力ギを渡される。

そして、

「なっ!？」

首輪の力ギを開けた。

「な、なにしてるんです!？」

「いや、SMの趣味とかないから」

「で、ですがねえ」

「いいか、言わせてもらっぞ」

俺は、オヤジを睨みながら、女の子を指差した。

「美少女に必要なのは鎖じゃねえ。可愛い服なんだよっ!!!」

ツンデレっばいんだけど、なんか違う

その場の全員が哑然としていた。

「い、いいの？」

女の子が、俺の顔を見て呟く。

「ああ、もちろん」

「……そう。で、でも、礼は言わないんだからね」

「なにこれツンデレ？」

「ツンデレってなによ？」

「いや、いいんだ」

なんだかドンドン恥ずかしくなり、奴隷の店からサッサと出て行った。

とりあえず、全員の首輪を外しておいた。

「で、名前は？」

近くの公園で、六人揃って芝生に座る。

こうして見ると、俺以外女の子しかいないな。圭子も含むが。

「あ、あたしは、クリス……」

100万ゴールドの値を持つ女の子が、少し顔を赤くしながら言った。

「私はステアだ」

青い髪 of 巨乳が、こちらを睨みつけるように言った。

「し、シィはシィです……」

眼帯の女の子が、俯いて言った。

「個性的すぎるな……これ」

圭子が呟いた。

確かに、最初から、ツンデレ、クーデレ、えっと、中二病？ だからな。

「デレてすらいらないし、デレる余地がなさそうだけだな」

「ま、奴隷と主人だしね……」

少々、現実の厳しさを痛感した。

「ちょっと、その巨乳」

「巨乳ではない、ステアだ」

圭子が言うと、ステアが怒り気味に言った。

「今日から、ステアはオレの性欲処理係な」

「は？ お前は女ではないか？」

「レズだよ、レズ」

「私にはそういう趣味はないのだが」

「いいじゃん、胸揉むくらい」

「胸揉むだけなら……大したことはないが」

「ならキスしていい!? 舌入れちゃったりして……ハアハア」

興奮しだしたぞ、おい。

完全にステアがドン引きしていた。

「……あ、あたしは何すりゃいいの?」

クリスが、まったくこちらを見ずに呟いた。

「あー、うん。食事とか作ったり、掃除したりしてくれるなら」

「えっ、それだけでいいの?」

驚きの表情でこちらを見る。

「いや、性欲処理係とか言いたいところだけどさ」

「うわっ」

「そういう反応になるでしょ? 嫌がる女の子を襲う気はさすがに無いしさ……。だから、せめて……」

ああ、言にくいなあ。

「せめて?」

「……俺の奥さんになってくれたら嬉しいなあとか……うえへえ」

「お、奥さんっ!?」

「あ、嫌ならいいんだけど」

「やつ、やるわよ! ベっ、別に奥さん役くらい! すすっ、好きでもないけどね!」

「典型的ツンデレだなあ……」

また耳まで真っ赤にして、そっぽを向かれた。
が、いそいそとこちらに寄ってきて、腕を組んでくる。

「これでいいの？」

「これ、カップルのやることじゃね？」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「……そのままでもいいよ」

胸が当たって、気分いいし。

「そうなの……？」

「う……うん」

なぜか、腕の締め付けが強くなってきていて、痛いんだけど。

「カップルみたい……ね」

あ、今、バキッ、っ音が。

「初めての彼氏が……こんな不細工なんて……」

「く、クリスちゃん？（裏声）」

「や、やめてよ、その呼び方、恥ずかしいし」

「……あのね、もうちょっと離れてくれないのよ？」

「奴隷でしょ？ なら、主人である広太様の言うこと聞かないと」

バキバキと腕が鳴り続ける。

え？ 俺、まだ死ねないの？

「うぎっ……主人の命令でっ……は、離れて……」
「そ、そんなに嫌なら離れるわよ……」

心底残念そうにしながら、クリスが腕を解放してくれた。
俺の腕が変な方向に曲がってしまっている。

「は、はは、クリスって、意外に胸あつたね……」
「ばっ、馬鹿にすんな!!」

褒めたつもりなのだが、クリスの張り手が俺の頬にヒットした。

広太は、死んでしまった!

「なんでやねん!!」

つい関西弁になってしまう。

「ちょまつ、腕を折られて生きてたのに、張り手一発で死ぬのかよ
!」

「だ、大丈夫? 広太様?」

「大丈夫なわけあるかい! 死んどんねんぞ!」

「え?」

「ああ、広太な」

いつの間にか、ステアに膝枕してもらっている圭子が言う。

「一発でもダメージ受けたら死ぬんだよ」

一瞬、四人の間に静寂が訪れた。
シイと破壊神がキャッキヤと楽しそうに遊んでいる。

「ほんとうに!？」

「ほんとほんと。肩叩いただけで死ぬから」

「そんな情報いらないから復活させてくれ!!」

たしか奴隷情報に、クリスは復活魔法を使えると書いていたはずだ。

カンオケになりながら、期待の眼差しでクリスを見つめていると、

「ふふつ、いい身分ねっ」

なぜか、クリスがカンオケになった俺を踏みつけた。

「どう？ 奴隷に踏みつけられる気分は？」

「あ、あの、クリスさん？」

何か、変なスイッチが入ってしまったようだ。

「ククッ、奴隷はあなたのようね。今日から、あたしが主人よ!」

なんか嬢王様になってるウウウウウ!!

「番外？」ロリの破壊神と眼帯つけたシィ（前書き）

9割セリフです

「番外？」ロリの破壊神と眼帯つけたシイ

広太たちが、なにやらドタバタしてる間の破壊神とシイの会話。

「シイちゃんは、わたしのおともだちなのよう！」

「いいよ、友達ね」

「でも……シイちゃんはおつきいから、どっちかっていうとオネーちゃんなのよう」

「そうかなあ。シイ、オネーちゃん、おつきいかなあ」

「オネーちゃんなのよう！ シイオネーちゃん！」

「あ、そういえば、あなたから名前聞いてなかったね」

「みんなからは、はかいしん、ってよばれてるのよう」

「破壊神？ うーん、女の子っぽくないから、シイと、もつとちゃんとした名前考えよつか」

「ちゃんとしたの？」

「うん。やっぱり、破壊神は物騒だよ。……そうだねえ、うーん」

「オネーちゃんがつけてくれるなら、なんでもいいのよう！」

「なんでもって言われると、逆に困っちゃうなあ」

「じゃあ、かつこいいのがイイわよう！」

「かつこいいの？ うーん、破壊神……破壊……ブレイク……イク……イクちゃん！」

「イク？」

「うん、かつこいい……くはないけどね」

「イク！ いいなまえなのよう！」

「ありがとう。気に入ってもらえて、シイも嬉しいよ」

「シイオネーちゃん、ありがとうだわよう！」

「ふふつ、どういたしまして」

「なまえももらったし、あそぼうよう！」

「そうだね。シイと遊ぼうか？」

「あそぶよう！」
「なにしようかな？」
「むう……」
「うーん……」
「そうだ、おてだましようよう！」
「お手玉？」
「そうよう！ ほらっ」
「あ、お手玉が出てきた！ すごいすごい！ さっきのって、魔法？」
「まほうなのよう！ テレポートのまほうよう！」
「小さいのに、イクちゃんってスゴいんだねえ」
「はかいしんなのよう！」
「あはは、そうだったね」
「でも……もうほとんどチカラはのこってないのよう……」
「……？ どうして？」
「こうたにわらわせられて、チカラなくしちゃったのよう」
「笑わせられて？」
「わたしのゆいーつのジャクテンなのよう」
「あらら……」
「だから、せきにんとらせるために、こうたについてってるのよう」
「大変だねえ」
「たいへんなのよう」
「ま、頑張ろうね、お互い！ シイは、奴隷だけどさ」
「シイオネーちゃんは、もうどれーじゃないよう！ わたしのオネーちゃんだよー！」
「ありがとね、イクちゃん」
「えへへ」
「じゃっ、遊ばー！」
「うん！」

その背景に、広太はクリスに踏みつけられ、
圭子がステアにキスを迫っているという絵面があった。

成績の良い部下に対して危機感を持たないと社会的に死ぬから気をつける

町外れの復活の泉にカンオケのまま落とされた。
復活し、水面まで泳いで顔を上げる。

「ぶはっ！ あっ、いたっ、足つつた！！」

「バカかお前……」

圭子が、俺を投げるように引つ張る。
そのまま泉から飛び出し、顔面から着地する。

「うえ……痛い……」

涙目になりつつ、すぐる目をしてクリスを見る。
あ、逸らされた。

「なによ」

「汚れたから拭いてくれない？」

「ハンカチ無いから無理よ」

「さいですか……」

そういえば、この子には服以外は何も買っていないのだった。

……。

今から数時間前だ。

カンオケに鎖をくくりつけて、六人は服屋へと向かっていた。

「さすがに、この格好は恥ずかしいからね」

クリスが自分の胸を片手で隠しつつ言う。

「どうやって、この子は俺のカンオケを引いてるんだろう？」

「ここですね」

シイが、一件の店の前で立ち止まった。

「ほう、服八靴店か。」

「って、シイちゃん、ここ靴屋じゃねえか!!」

「あ、そうみたいですネ。……チツ、紛らわしい」

「なんか本性現し始めたんですけど、怖いんですけど」

「そんなことないですよー」

「じゃあ、まずは俺に乗せてる君の片足をどけようか」

チラツと見えたシイのお尻には布らしき物はなく、明らかにノーパンだった。

危うく、見ちゃいけない物まで見るところだったぞ。

「いい高さだな、これ」

「ステアさんまで乗らないでください」

「座り心地もいいわよ」

「うおいクリス！ 重いから！ 座らないで！」

「やっぱり昼寝が一番ですねえ」

「シイちゃんも、うつ伏せに寝ないでよ！ あ、やっぱりペッタンコだ」

死語を放った瞬間、奴隷三人が片足を上げた。

「やっとどけてくれ……え？」

上げたまま、動かない。

三人が目配せし、

「せーのっ！」

というクリスのかけ声で、

「「「チェストオオオオオオオ！」」「」」

「ふぼほうー！」

ドゴッ！！ と、三つのかかと落としが降り注いだ。

「お、オーバーキルかよ……！」

「胸の話は、あたし達の前じゃ死語よ」

「つか、主人に何してんの！？」

「はあい、ごめんなさいご主人様あ」

「うわ、今のはイラッとした！」

「あたしい、イマドキのギャルだから分かんないんですう」

「いつだよ！ どんだけ昔なんだよ！」

「はいはい、下僕は主人に口をきかないでね？」

「立場逆転してんじゃねーか！！」

さすがに、奴隷を買っておいてコレはひどい。

服屋を見つけ、そろそろと六人が入る。

「あ、広太様！ こっちこっち！」

「クリス……えらいハシャいでんな……」

彼女のところまで行くと、

「ねっ、似合うかな？」

満面の笑みを浮かべ、自分の体にレースの服を重ねてみせた。

「い、いいんじゃない？」

「反応が薄いわね……広太様は何がいいのよ」

「あの、一ついい？」

「なに？」

「敬語でもないのに、様付けっておかしくね？」

「別に、あたしの勝手でしょ！ ……奥さんだし」

「え？ なぜ奥さんなら様付け？」

「だって、夫には敬意を見せなければならないうって小さい頃に教わったのよ」

「どこに敬意があるんだよ……」

「広太様って呼んでるし……。……、……」

「他に無いなら言っなよ！」

「うるさいですね！ いいじゃないですか！」

「無理やり敬語になるな！ 違和感あるわ！」

「肩、お揉みしましょうか！？」

「半強制の勢いで迫るな！ もう、サッサと服決めちまえよ！」

「分かったわよ……」

クリスはどんどん煌びやかな服の並ぶ中を進んでいき、俺をそれについていく。

垣間見えた値札が「4000ゴールド」とか書いていて、背筋が寒くなった。

「な、なあ、クリス？」

「なによ、広太様」

「服ってさ、安いのでいくらするんだ？」

「おかしいこと聞くのね。10ゴールドくらいよ」

「ここ、超ブランドじゃねえか！！」

「へ、へえ」

「広太様つて、かなりお金あるでしょ？」

「かなりあるけど」

「あたしの値を見て悲鳴もあげないなら、それだけの金持ちなのよね？」

「さあ、どう話そうか。」

まさか、自分の不細工顔を笑われて、お金カンストしたなんて言えないし。

「そ、そういうことだよ」

「どこか、由緒ある血族の出なの？」

吐き捨てるほどある血族です。

「あはは、そういうことにしてくれ」

「ふーん、ぶさ……冴えない顔してるのにねえ」

「はは、……後ろから襲ってやろうかこのクソ女」

「CQC出来るから、後ろから襲っても無駄よ」

「お前もかよ！ 圭子も出来たぞ！？」

「へえ、あれ、結構めんどうなのになえ」

クリスが、「3000ゴールド」の服を手にした。

「どう？」

「どうって言われても、俺に服のセンス無いし」

「……そう」

「クリスの好きなように買えばいいよ？」

「……あんたに選んでもらわないと、意味ないじゃない」

「なぜ俺？」

「よくよく思ったけど、あんた耳いいわね」

「百メートル先に落ちた針の音さえ聞き取る男、スパイダーマー！」

「それは良すぎでしょ」

「普通にツッコまれた……」

ま、別にどんな返答か期待してたわけじゃないけど。

「とにかく、これだけ買う」

「下着無しでいいなんて、お前、相当な痴女だな」

「あっ……！」

クリスが服抱きしめたまま顔を赤くしてしまった。

「わ、分かってるわよ……」

「俺が選んでくるよ」

「うわっ、最低！」

「最低で結構！俺が選んだ下着を美少女が着る、それが人生最大の喜びなんだよ！」

「服は選ばないのに下着は選ぶの!？」

「そうさ! ひたすらに下着を舐めたあとに美少女に渡す!」

「キモい!! ここまでキモいと、あたしでもドン引きよ……」

「その下着で俺に抱かれてくれ」

「死んでも嫌よ!!」

いいね、いいツンデレだ。

「下着はあたしが選ぶわよ!」

「選んだら持ってきて」

「どうして？」

「舐めるから」

「もういい!」

心底うざそうな顔をして、クリスは俺から逃げるように駆けて行った。

からかっただけなのになあ。

「じゃあない、俺も戻るか」

アイツは俺の嫁、ただし二次元に限る

「クリスは、どこにいる？」

血のまみれた王室間、生臭い臭気が漂う中、二人の男が対峙していた。

片方の男は、その身を粉塵で汚しているものの、一切の外傷を負っていない。むしろ、傷つかなくしているような必死がある。

彼の顔は、苦渋で歪んでいた。

「彼女なら、僕の部屋にいるよ」

その彼に対峙する男は、砂泥でまみれた王室にしながら、傷どころか汚れ一つ無く、まるで今まで戦ってこなかったような余裕がその笑みから察せられる。

汚い男は、綺麗な男を睨み、腹の底から吠える。

「お前だけは……ぶっ殺オオオオオすツツツ！！」

「たった一撃で死ぬ身でありながら、神速の剣を持つ僕に戦いを挑むか！ かかってこい。その一撃を、この上ない痛みにくれり！！」

両者が足を上げると、一瞬にして王室が爆発した。

……。

「みんな、揃ったか」
「おう」

俺の目の前には、奴隷用の汚らしい布ではなく、女の子らしい服装の三人がいた。

「なんか……恥ずかしいなあ」

クリスが、ひらひらとしたスカートを指でつまみながら、そわそわしている。どこかドレスのようで、とてもクリスに似合っていた。その長い髪が舞い、クリスが微笑んだ時、俺は不覚にもドキッとしてしまった。

「やはり、軍服の方がシャキツとするな」

ステアは……軍服？ 将校が来ていそうな青い制服を着ていて、下は上に合わせた感じの青いズボン。右腰には鞘に納められた短剣がささっている。

圭子が横でブーブー言っているが、無視を決め込んでいた。

「うん、いいねえ」

シイと言えば、ゴスロリをミニスカートにした服を着ている。ひらひらにひらひらが重なって、可愛いのだが……。間違いない。あれ、アニメにいたぞ。

「ありがとね、イクちゃん」

腰を下ろし、シイは破壊神に目線を合わせて、その頭を撫でた。

破壊神が嬉しそうに笑う。

「にあってるよう！」

「そうだよ、イクちゃんが決めてくれたんだもんね」

と、不可解な単語を耳にした。

「イクちゃん、って？」

「あ、広太様は知らないんでしたね」

シイが小さな破壊神の体を抱き上げる。

「この子の名前、破壊神じゃ可哀想ですし、だから名前を付けてあげたんです」

「なるほど……」

仲が良さそうに笑う二人を見て、俺も笑う。

「さて、じゃあ行きますか」

柏手を叩き、切り出す。

みんなから賛成の声が挙がり、俺たちは店から出た。

……。

ついでに町からも出た。

そして、泉で復活し、今に至る。

そう、みなさん忘れていると思うが店で起きた一連の出来事、

俺、全部カンオケの姿でやってましたから。

かなりシユールだ。

カンオケが美少女に囲まれて、服の話で盛り上がるって……。

「さてと、どうする?」

「そうね」

クリスが話す。

「あたしの国に行ってもいいかしら?」

「国?」

「うん、戦争になって、慌てて逃げたから、今どうなっているか知りたいの」

「どう考えても潰れてるだろ……」

そこまで言って、急いで口を塞いだ。

「確かに、もう潰れて、無くなってるかも……」

クリスは悲しげな表情になり、肩を落とす。

「お、おいおい、そんなに落ち込まなくても」

「いいわ、行きましょう」

肩を落としたまま、クリスが俺の腕を掴んで引っ張る。そして、腕を無理やり組んだ。

「あたしが腰抜けだから、起きたことだから」

「え？」

どういう意味だ？

腰抜けだから？

いったい、クリスに何があったのか。

彼女は何も語らない。ただ、目を伏せながら、俺の腕を引っ張るのだ。まるで、何か支えがなければ倒れてしまつていようような。

支えるさ。

「ち、ちよつと！」

クリスの体を持ち上げて、お姫様抱っこをする。

彼女は耳まで赤くしてジタバタと抵抗するが、俺の腕は緩まない。これが、最強の力か。

「お、降ろしてよ……」

ついに涙目になるが、

「嫌だね」

一言言つてやると、クリスは黙った。

観念して、俺の首に腕をまわして、自らも抱きつく姿勢になる。

「お姫様、お姫様、お城はどちら？」

「……何もかも無くなつた場所よ」

「無くなつた場所？」

クリスは奇妙なことを言い出した。

「あたしの先祖が、先住民を追いついてまで手に入れた場所。そして、今はあたしの国も潰れたわ」

「だから何もかも無くなった場所、かあ」

「あたしにはあの場所に帰る資格は無いわ。でもね、どうしても最後に見たい物があるの」

「どんな？」

「お人形よ。お母さんが編んでくれた、手編みのぬいぐるみ。奴隷生活の間、あれだけが気がかりで、ずっと心配していたの」

そのまま、交わす言葉もなく歩く。

これが戦争の火蓋を切ることになるとは、誰が予想できただろう。たった一つの国が滅んだから？

たった一人の王女が生きていたから？

いいや、たった一つの大切な物があつたからだ。

こんな美少女だらけのパーティーにいられるか！俺は村に戻るぞ！

「宿屋……」

いったい、何キロ歩いただろうか。

樹海の中を、我らパーティーはそのそと進んでいく。

「つかれたのよう……こうたおんぶー！」
「はあ？」

ぴよんぴよん跳ねて、破壊神がおんぶと連呼している。

「嫌だよダルい」

「じゃああたしをおぶつてよ」

「クリスはお姉ちゃんでしょ！　もう、いつまでも子供なんだから！」

「お母さん！？　そこでお母さん！？」

俺だつて疲れているというのに、クリスまでおんぶだと？　殺す
気が……。

「私をおぶつてくれ」

「ステアさん、あなたはいろいろとダメです」

「むう……なぜだ……。……体重が重いからか？」

いやいや、胸が大きすぎて、体制がキツくなりそうだからです。

「シイをおぶつて、広太様」

「あのね、シイちゃん。これだけの人数を断つておいて、君だけお

ぶるわけないでしょ」

「なら自分から行きます！」

と言つて、シイが俺の背中に乗った。

腰を曲げてしまい、受け入れる形になってしまつ。

「その手があつたわね！」

「ちょ、ちよつと！」

クリスが、俺の胸、つまり正面から抱きついた。

いや、キツいつて……これ……。

さすがに最強の力でもキツい。

「わたしはかたぐるまよう！」

「ぐふっ！」

小さな体のどこにそんな力があるのか、破壊神は驚異の跳躍力で俺の肩に両足を置いて、肩車をさせてくる。

「あうあう……。あんいほふへひい（何にも見えないい）」

シイちゃん、これ破壊神のお尻に顔うずめちゃってんじゃね？

「わ、私は……」

「ステアこのやろー！ もう無理なの分かつて言ってるな！？」

「ううん……」

「おいおい、どこに乗れるっていうんだよ……」

「頭？」

「殺す気満々じゃねえか！！」

首の骨がイキそうだ。

「ああ……羨ましいな、広太」

「圭子よ、本当にこれが羨ましいか？」

全体に30キロ以上の体重がかかってるって、常人ならどこか壊しかねない。

「なあ、ステア！」

「だが断る」

圭子が爛々とした瞳でステアに近寄る。しかし、そっぽを向かれています。

「ああん、違うつて！ おんぶして！」

「……嫌だ」

「でもおんぶしてもらってもんね！」

「なっ！？」

圭子は、俺とクリスがやっている正面からのおんぶを、ステアにしていた。

ただ、大きな胸に押し返されているのだが……。

「胸に顔をうずめるな！」

「ああああん！ ステアのおっぱいだいしゆきなのおおおおお！」

「変な声をあげるな気色悪い！！」

後ろから女の子同士のけしからん会話を聞きつつ、歩を進める。

「おっ」

木々の合間に、まぶしい光が入ってきた。
外だ！

「やった…… やつと出られる……」

「もうおんぶおしまいなの？」

「クリスさん、あなた、一応女の子なんだからね？」

「このままでいいもん」

「子供か！？」

「ううっ！」

駄々をこねて、クリスが俺の胸にすりすり顔を押しかけてくる。
そういえば、俺の手、クリスのお尻触っちゃってるけどいいのかな？

「やんっ」

気づいてしまいましたか……。

「どこ…… う、触っ…… てんのよ……」

「99%ぐらいお前のせいだと思うが」

「セクハラ」

「言いがかりはよせ」

「変態」

「変態はステータスだ」

「希少価値だ」

「なんでそのネタ知ってんの！？ ってか、変態には価値無いからね！？」

「このままおぶってよ」

「あのね、さすがにこれ以上行くと俺死ぬから」

「死んじゃえバイナダー」

「そこまで言うか！？……キャラ変わってきてんぞ、お前……」

「嘘だツツッ！！」

「ニコ動好きなのな、お前……」

三分の二はひぐ。しネタだったが。

「とにかく、三人とも、俺から降りなさい」

「うう……楽だったのにい」

「ありがとうございます、広太様」

「な、なんかおまたきもちよくなってたのよう」

「破壊神よ、マジで消されるから止めてくれない？」

今回、下ネタが多すぎる。

「とりあえず出られたわけだが」

「おっぱい気持ちいいのおおおおお！！」

「黙れ変態！！」

圭子が未だにステアに抱きついていて、声を荒げている。

「どうしてこう、まともな女の子がいないんだ……」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「ゲームだから」

「口揃えて言ってんじゃ……最後の一人誰だよ！？」

明らかに一人多かったぞ、今の。

「ってか、こういうメタ発言、許されるのか？」

「ゲームだか」

「もういい」

この流れは、いつの間にかツツコミになっている俺にとっては不毛な戦いだ。

圭子がボケに回ったせいで、普段ボケのはずの俺がやらなくちゃいけなくなってしまった……。

「あ、ホテルあった！」

「え？」

クリスが嬉しそうに笑い、顔を向けた先を見る。

おう、本当にホテルみたいだ。壁はピンクで、キラキラとした装飾があつて、【ホテル・夜のお楽しみ】と書かれてい……

「ラブホテルかよ……！」

圭子がやつとツツコンでくれた。けどね、ステアのおっぱい揉みながら言われても、説得力ないのよ？

しまいには、ステアにゲンコツ食らわされて、叩き落とされてるし。

「おっぱい揉むくらいなら、って言ってたじゃん！」

「揉み方がおかしいんだ！」

「ええ……揉み方がおかしいって、どんな風によ……」

「そ、それは……」

あーあ、ステアさん、顔を真っ赤にしてもじもじしちゃってるよ。

「なんていうか……つまんだり……とか、……変な気分になってきてたっていうか……」

「ほうほう、それでそれで？」

「こ、広太様！？ 顔近い！！」

あまりにも興味があまりすぎて、迫りすぎてしまったようだ。

「赤面こそ最強だよな！」

張り倒されていた圭子がすくつと立ち上がり、親指を立ててきた。

「そのためにおっぱい揉んでたのか」

「おうよ！」

「……嘘だな？」

「どうしてバレた！？」

「もうボケ担当になれよ……」

あの頃の相方は、もう帰ってこないみたいだ。

「ラブホテルも宿屋みたいなもんだし、泊まりましょうよ」

「あのねクリス、確かに宿屋かもしれないよ？ でもね、用途が違うからね？」

「あんたになら……抱かれてもいい……」

「女の子が簡単に貞操を差し出すんじゃないありません」

「……冗談に決まってんでしょ。誰があんたみたいなぶさ……不細工と」

「せめて言い直せよ！！」

「あたいゝちょーそいうの分かんないっていつかあ
「いい加減に古風なギャルはやめて」

男女で二人きりになると欲望が加速しがちだが、そこでブレーキをかけられるの
「はいはい、六名様ですね。こちらが各部屋の鍵です」

泊まるアテもなく、とりあえずラブホテルらしき建物に入ったの
だが、

「木造ね」

外観をハデにしとけば客が入るだろう、という思惑らしく、内装
は古びた温泉旅館だった。

足を踏み入れた時、また転生したのかと思った。

「おとまりだよー！」

「イクちゃんは、シィと一緒にの部屋だね」

どうやら、仲良し二人組みはすでに決まっただらしい。
残る四人だが、

「広太様は圭子と寝たらどうだ？」

「言い方に気をつけようか」

ステアが圭子の首根っこを掴んで、差し出してきた。
寝たら、って場合によってはCEROが跳ね上がりかねない。
圭子が上目遣いでステアを見て、服の裾をつまむ。

「やだあ……ステアと寝るもん……」

「猫なで声をしてダメ」

「ふええ……ぐすん」

「……。……絶対に何もしないなら」

「いいのか!？」

「……。何もしないなら、な」

クールがデレた!？

もうフラグ立てたの？ 早くね？ ってか、これがギャルゲーだとしても、好感度上がるどころかただ下がりだろ。

わーいわーいと無邪気に喜ぶ圭子を連れて、ステアが自分たちの部屋に入っていた。

「あんたとか……」

「露骨に肩を落とさないでもらえます?」

確かに自分でも、これはひどいと思っているが。

「外で寝てくれない?」

「最低! 外道! 鬼畜!」

「そこまで言わないでよ。あんた、襲いそうだし」

「襲わねえよ!」

「ならここで服脱ごうか?」

「よろしく願います!!」

あ、反射的に土下座してしまった!!

クリスが俺の頭に足を乗せて、グリグリと踏みつけてくる。

「ほらあ、もつとねだりなさいよ? 卑しくて、汚い家畜のクセに、おねだりの仕方も分らないわけえ?」

「ぶひー! 俺はクリス様の家畜……だわけねえだろおい!!」

「あうっ!」

逆らって顔を上げようとすると、クリスがパタリと尻餅をついて倒れた。

もろにパンツが見えている。

「あたた……家畜のくせにい……、！？」

「あ、いやっ、ちがつー！」

「変態ー！」

クリスの、座ったままの回し蹴りを回避する。
格闘技術ハンパないな、コイツ……。

「いい！？絶対に、襲わないでよー！」

「ダチヨウ倶楽部のノリですか？」

「どうぞどうぞ……って違うわよ！」

「ノリツッコミ貰いました！　ってか、本当にキャラ崩壊してんな」
「テレビは好きだったからね」

そうだとしても、時代とかいろいろおかしい。

「さっさと開けて、中に入れなさい広太様」

「開けてとか、な、中に入れてとか卑猥……」

「そ、そういう意味じゃないわよー！」

客が俺たちしかないとはいえ、ここで騒ぐのも旅館の方々に迷惑だ。

手早く鍵を開けて、部屋に入る。

「ベッドおつきいわね」

「二人が一緒に寝るためのだろ」

「それくらい知ってるわよ……」

「おっ？　どこで知ったのかな？　おっ、おっ？」
「うざっ」

「ませてますなあ」
「黙らないとあんたのケツに鋭芯魔法ぶち込むわよ」
「歪みねえな」

夫婦漫才も十分なので、そこらへんに荷物を置く。
クリスが、ピヨンと跳ねてベッドに飛び乗る。

「ふう……温かいお布団……久しぶりい……」
「奴隷生活って、どれくらい長かったんだ？」

俺はと言うと、開けたベランダにある木の椅子に座っている。

「一年ぐらいかな？」
「なげえ」

「あたし、値段高いでしょ？　誰も買いたがらないのよね。あんたに買ってもらった時は、メシア様何かだと思ったわ」

「メシア様に何か一言」
「くたばればいいのに」

「あー俺怒った。奴隷商人に売っちゃおうかなあ」
「止めてくださいなんでもしますからあ！」

クリスが毛布に顔をうずめて、潤んだ瞳で言った。

「なんでも……と言ったな？」
「言っただけど何よ……」
「夜のお供を」
「死ねばいいのに」
「せめて舐め」

「くたばれ悪害」

「なら入れ」

「土に還れ」

「おっぱいを揉むことを強いられているんだ！」

「……」

無視された。

「ちっぱいちっぱい」

「ちっちゃくない」

「シイちゃんとどっこいどっこいでしょ」

「あんなにペタンコじゃないもん」

「揉まないと分かんない」

「じゃあ揉みなさい」

「……えっ？」

呆然とする俺に、クリスが胸を張ってみせた。

多少揺れた胸部が、大きさを物語っている。

……こか！！

「いいぜ……テメエのおっぱいがちっぱいじゃないってんなら」

右腕の裾を上げて、右手の指を動かしパキパキと鳴らす。

「その夢想をぶち壊す！！」

一気に駆け寄り、胸に向かって右手を伸ばした。

掴んだ！！

間違いない。胸の感触だ！ 尻が柔らかくなった時のような感触に似てなくもない！！

「これがおっぱいか!」

「おっぱいおっぱいうるさいわよ!」

「違うね。おっぱいとるさいんじゃない。おっぱいにつるさいんだ!」

「なに上手いこと言ったみたいな顔してんの!? あんたのどうでもいい価値観とかいいから、揉んだんなら手を離しなさいよ!」

「もっと揉ませろ!! ちーっちっちっちっちっぱい」

「ボインボイン、って言わせんな!」

「コイツ…… どんどん羞恥を無くしていつてやがる……!」

「あんたのせいでしょ!」

「おねがい! 夕飯まで揉ませて!」

「胸の形おかしくなるわよ! 何時間あると思つてんの!」

「俺の今夜のおかずにしたんだ!」

「夕飯だけにおかずって? 上手くないわよ!」

などとやりとりをしながらもひたすらに揉み続ける。

「ちよっ……ほんとに…… やめて…… よ……」

「いいや、我慢できない、揉むね!」

「ひゃうっ…… おかしくなるからあ……」

「変な声を出すんじゃない! はしたない!」

「あ、あああんたのせいでしょ!」

「へへっ、よがってやがりやすぜ、この女あ」

「どこの裏社会よ……」

「君がっ! エロくなるまで! 俺は! 揉むのを! 止めない!」

「あうっ……ほんとに…… 離してよお……」

ベッドに仰向けに倒れたクリスが、頬を朱に染めて喘ぎだしたの

で、これ以上はやバいと思い止めた。

ちよいとやりすぎたか……。

クリスは目の端に涙を浮かべて、ハアハアと深呼吸を繰り返している。

「ううん……」

このまま、この部屋にいても良いのだろうか。
まずは俺が外に出て、クリスの状態を回復させることにした方が
いいかもしれない。

「ご、ごめんな、クリス！」

扉を開けて、合掌して謝る。

チラリとクリスがこちらを見て、よろよろと手を伸ばしてきた。

「ひとり……嫌あ……」

どうしてコイツは、たまに幼い子供のようになるのだろう。

目を半開きにして、頬を火照らせたクリスの色気に一瞬、理性が
飛びかけたが、なんとか平静を保つ。

これ以上は惨事になりかねん。

「一緒にいて……広太様あ……」

震える手を必死に動かし、俺は外に出て、扉を閉めた。
扉の奥から、まだクリスの甘えるような声が聞こえる。
苛立ちから、髪をぐしゃぐしゃと掻きまくる。

「ああ……俺は二次元に来たんだ……なんでも思い通りになるはず

なのにい!!」

逆に、思い通りすぎて怖くなってしまふ。

一番の敵はやはり、自分らしい。

全てを受け入れてしまいそうなクリスを見て、理性が急ブレーキを踏んでいたのだろう。

彼女のうつとりとした眼差しは、ここが現実であり、これがエロゲではないことを思い出させたのだ。

「ちゃんと謝らないとなあ……でも、おっぱい触れて良かったなあ」

肩を落として、あてもなく廊下を歩く。

「……そ、そんなものを舐めるな!」

横からステアの叫び声が聞こえて、驚きで肩がすくみあがった。どうやらこの奥では、絶賛レズプレイが始まっているらしい。

ああ、開けたとも、ええ。

「えっ?」

中では圭子が、アニメキャラの美少女フィギュアをなまめかしく舐めているという絵面があった。

ステアが止めにかかったところで、時間が止まってしまったかのように、三人の動きが止まった。

「よお、私物を持ち出せるらしいから、オレの部屋のフィギュアを持ってきた。あんまり懐かしいもんだから、つつい舐めちゃってさあ」

唾液でしつとりと濡れたフィギュアを見せつけて、圭子が笑った。
俺も画面を呼び出して、持ち物から一つ選ぶ。

「鉄拳制裁！！」

ダンベルを圭子に投げつけた。
額に命中し、彼女はもがき苦しんでいる。

「いつてえ！！　なに投げてんだよ！！　ゲームじゃなかったら死んでたぞ！！」

「これほど体を鍛えてて良かったと思うことはないな」

「広太様。なんだ、これは？」

転がったダンベルを、ステアがヒョイと拾った。

「ダンベルだよ。筋肉を鍛えるための」

「ほう。使ってもよろしいか？」

「使い方は、まあ簡単に、上げ下げするだけでいい」
「なるほど。これはいい暇つぶしになる」

細い腕のどこにそんな力があるのか、結構鍛えている俺でも辛いダンベルを、易々と上げ下げしている。

静かに部屋から出た。

一応、胸を揉む以外のことはしてないらしい。

「次は破壊神たちの部屋を覗こうかね」

あまりにほのぼのしすぎて、空気になりかかっている二人だ。
ゆっくりと扉を開けると、

「ほ、ほらあイクちゃん、ここ、舐め……、……！？」

「シイちゃんが上着をたくし上げて、素肌があらわになった胸を破壊神に見せていた。」

真っ裸になった破壊神が舌を出して、胸の突起を舐めようとしているところまで時間が止まっている。

ゆっくりと扉を閉めた。

[illegible]

閉じようとした扉にシィちゃんが指を食い込ませて、抵抗してくる。

「いぢ、ふんふんふんふん」

「どうぞじゃなくて！ 広太様、話を聞いてくださあい！！」

「マジで、なんかゴメン。ロリコンでレズでもいいよね。人は皆、心に残ろめたい物を隠し持っているものです」

「そんなことで悟らないでください！」

「本当に。うん、レズが二組いてもいいよね。別に構わないよ？
そっという恋愛の仕方もあるもんね」

「そうじゃないんです！　ち、ちよつとした出来心なんです！」

「どうぞ続けてください。何も見なかったことにしますから」

「む、胸を舐められたら気持ちいいのかなあ、とか思っちゃった
けなんです！　小さな女の子が好きとか、全然そんなことないです
！」

「いい天気ですね」

「お願いですから話を聞いてくださあああああい！！」

座り込んで、シイちゃんはわんわんと泣き出してしまった。

「ぐすつ……違うんですう……」

「なあ、白状しときやしようや。田舎のおっかさんも泣いてるぜ」

この事実を知ったら、まず泣くだろうな。

「……女の子同士なら……こういうのもいいかな、とか……それだけなんです……」

「よし、分かった。存分に『幼女』におっぱいを舐めてもらいなさい」

「はい！」

「やっぱレズでロリコンじゃねえか！」

「ああ、しまったあ！！」

まともな性癖じゃない奴が二人か……。心配だ。主に俺がハブられないか。

ハプニングに遭遇したら舌を噛めば捗るぞ（前書き）

最後は舌を噛み切って死ぬんですけどねえ

後半、ちょっとしたエロゲみたいなシーンがあります
性交こそしていませんが、そういうのに抵抗のある方は次に進んで
ください。

ハプニングに遭遇したら舌を噛めば捗るぞ

晩飯は、部屋に運ばれた物を食べた。

質素と言えば質素だ。

豆腐と野菜の煮えた鍋に、白米と焼き魚が出された。どう見ても日本食である。

クリスが目をパチパチとしながらも、フォークで焼き魚をワイルドにぶっ刺した時は腹を抱えて爆笑した。

「なにがおかしいのよ!」

「ふ、フォーク? え、ふえっ、そんな豪快な食い方、初めて見た」
「知らないんだから仕方ないでしょ!？」

「うん。分かった、そのまま食べばいいと思うよ?」

「言われなくても、そうするわよ……」

昼頃の、子供のようなクリスではなくなっていた。

鍋に入っている豆腐をフォークで刺そうして、ボロボロと落とすクリスを見て更に笑う。

いい加減に不機嫌になってきた彼女のために、俺がいろいろやってやった。

「あ、ありがとう」

「口移しの方が良かった?」

「へえ、やってよ」

フォークで刺した白菜を俺の口にくつつけてきた。

あまりの熱さに悲鳴をあげて転げ回る。

「ふふっ、バカにした罰よ」

「ひ、ひひよい！　こうなったら意地でも口移ししてやる！」

口に白菜を入れて、クリスに近づく。

「え、マジでやるの！？」

「ぶははは、当たり前だろう！」

「あ、あわわわ……」

座ったままクリスが後ずさる。

「逃げようとしても無駄なのだ」

「ちよつと、ストップ、ストップ！」

「ストップ？　誰に口をきいているのだ。デーモン小暮閣下だぞ？」

「そんな喋り方しないわよ」

「貴様も口移しの刑にしてやろうかあ！！」

「そうだ。コイツ一撃で死ぬんだっけ」

不穏なセリフに、俺は素直にクリスから離れた。
カンオケになったら、一晩中固い床の上で眠ることになりかねない。

ニヤニヤとしたクリスの顔を睨みつつ、焼き魚を頬張る。

「眠ったら速攻、襲ってやる……」

「どんな風に？」

「え？　どんな風に、って……。うーん……」

そういえば、何にも考えてないんだよな。

「ほおら、何も考えてない」

「そ、そそんなことないぞ？」

「なら、なにする気よ？」

「裸になって一緒に寝る、でしょ」

「寒いわよ」

「ですよー……。じゃあ、抱き枕みたいになんと抱きつく」

「抱きついて？」

「耳にフーッと息を吹く」

「そしたら？」

「『きゃー！ カッコイ抱いて！』となるわけだ」

「ならないわよ！」

「それがダメなら、お前の胸の谷間に顔をうずめて寝たい」

「窒息死するわよ」

「するわけねえじゃん」

「あんた、喧嘩売ってんの……？」

いや、窒息死どころか、このままじゃ首の骨が折れかねない。

「まあ、とにかく、次は風呂だ」

「お風呂だけど、あんた、まさか覗くつもりじゃあ……」

「そんなわけねえじゃん！ まさかお前、俺が本当に覗く、とか思

ってんじゃねえか！？ そんなの、水に洗い流しちまえ！」

「すでに熱湯並みに暑いわね」

「そういう時は馬耳東風。馬の耳をつけてね東から風が、フ、っ

てだわけねえだろうおええ！？」

「どこの有名テニスプレイヤーよ……」

「やっぱりお前、ニコ動好きだろ」

……。

風呂の時間になった。

男湯と女湯に別れた暖簾のれんの男湯をくぐり、中に入る。

ただのお湯とは違った匂いがして、テンションが上がっていると

「おっ？ お前も今から入るのか」

圭子がすっ裸で、男湯にいた。

「なんでお前ここにいるの？」

「男だからだろ？」

「そこは常識として、女湯に行こうぜ」

「あいな、オレは確かに女になった。そして、ステアによって今まで理性がぶっ飛んでいた。でもな、お前にダンベルを投げられた時、気づいたんだよ」

「なにを？」

「オレは冷静で常識的なツッコミキャラだ、ということを」

「なるほど。本当は男だし、女湯に入るのはおかしい、と思ったんだな？」

「おうよ！」

「お前の頭の方がおかしい」

「なんでだよ！？」

小振りな胸を揺らして、圭子が抗議してくる。

「オレは男だぞ！？」

「あいな、今、お前の体は女なんだぞ？ なら、男である俺と一緒に男湯に入るといのはおかしい」

「いや、女湯に入る方がおかしい」

「いや、お前の頭がおかしい」

「お前の方がもつとおかしい」

「ああ！？ やろうつてのかネカマ野郎！！」

「上等だゴルァ！！ かかってこい！！」

お互いに駆け出して掴み合う。

だが、CQCを会得していた圭子にかなうはずもなく、

「痛い！！」

簡単に技をかけられた。

胸が顔に押し付けられて、息がしにくい！！

「このままオレのおっぱいで窒息させてやろうか！」

「この下り、似たようなことを前にやったことがあるような無いような痛い痛い！！」

「ほらほら、どうだあ？ 夢にまで見たおっぱいだぞあ？」

「つてか、まだ死ねないのか俺！？ こんなに痛いのに、なぜ死ねない！！」

「ほれ、オレに謝れば許してやろう」

「ごめんなさいごめんなさい！！」

「よしオーケー」

圭子の技から開放されて、俺は尻餅をついた。

胸の感触がまだ顔に残っていて、少しばかり得をした気分になった。

「ああ、くそお……」

「オレに勝とうなぎ、百年早いんだよ、ケケッ」

と言って、圭子が風呂場へと入っていった。

俺も服を脱いで、近くにあったカゴに放り込む。備えてあったタオルを掴む。

友人の裸に興奮していた自分を抑えこんで、深呼吸をした。そして風呂場へと入ると、圭子が湯船に浸かっていた。

「いい湯加減だぞ」

「そうかい……」

テンションがだだ下がって、まともにボケることもないまま、圭子と同じ湯船に足を入れた。

腰まで落として、ぷはぁ、とため息を吐く。

「……何年ぶりぐらいかな」

圭子が言った。

「なにが？」

「お前と一緒に風呂入ったの」

「さあ？ 高校……一年ぐらいじゃね？」

「そうだったけ？ あん時は楽しかったな」

「いっつもお前は、俺の股間を蹴飛ばそうとしてきたよな」

「で、最終的に蹴り合いになってたよな」

「だってお前、途中からマジになっってくるし」

ムスツとした顔で俺が言っていると、圭子が笑った。

「楽しかったんだから仕方ないだろ」

「まあ、な……」

「なあ」

圭子がこちらに振り向いた。

可愛い顔になってしまった友人にドキドキしつつ、それを表に出さないように気をつける。

「また、蹴り合いやろうぜ？」

「チ。コ無いじゃん。お前」

「そうだった……。じゃあ、オレが蹴りに行くからお前逃げて」

「不毛じゃね！？ オレが圧倒的に不利だろうが！」

「逆に、お前がオレを捕まえられたらオレの処女をあげよう」

「いるか！！ たとえ見た目は女だとしても、友人を襲うほど墜ちちやいねえよ！」

「男なら誰でも興味あるだろ？ 喪失した時って、どんな痛みなのか、とか」

「キモッ。男の趣味があつたのか、圭子……」

「だって私、女の子だもんっ」

「普通に可愛いから止める」

「欲情した？」

「してない」

「チ。コたつた？」

「たたない」

「おっぱい揉む？」

「今日すでに揉んだ」

「な、なに！？」

圭子が湯船から飛ぶように立ち上がった。

見ちゃいけない物を顔の全面に出されたんだが。

寒かったらしく、圭子は、ブルツ、と体を震わせて、また湯船に腰を下ろした。

「お、お前、まさかクリスのを揉んだのか！？」

肩を揺さぶってくる圭子から目を逸らしつつ答える。

「そうだよ……」

「もうそんな関係だったのか？」

「おっぱい小さい、ってずっと馬鹿にしてたら、揉んで確かめると言われたので揉んだ」

「すげえな、お前……」

「なにがだよ」

「現実じゃ全くモテないお前が、ゲームに入った途端にモテるなんて」

「遠回しに、俺は二次元でしかモテないって言いたいんだな？」

「そうとも言っ」

「……襲ってやろうか」

「どうぞどうぞ」

「そこは断れよ……」

「どうせ天国に行くまでの仮の体だぜ？　むしろ淫乱ビッチにならないと勿体無い」

「なるほど。そういう発想もあるのか」

「関心しただろ」

「してない」

「襲う気は？」

「ない」

「オレとは？」

「やってられませんわ」

「ありがとうございます」

「漫才かよ！？」

「それは置いといて、と」

圭子が、荷物を運ぶジェスチャーをした。

次に、俺の両手を掴んで、

「私……広太さんに、襲ってほしいんです……」

潤んだ瞳の上目遣いで言ってきた。

「嫌だと言ったら？」

「オレから襲う」

「逃げたら？」

「ケツバツ」

「死ぬぞ!？」

「大丈夫大丈夫。穴に入れるし」

「固くて太いなオイ!! やったら、痔どころのレベルじゃなくなるぞ!？」

「ああん、歪みねえな。まあ、それはいいんだ」

圭子が、俺に顔を近づけてきた。

後ろへ下がろうとするが、ちよつと進んだだけで壁にぶつかり、これ以上下がれない。

迫ってきた圭子が、俺の体にまたがって、細い手で俺の頬を撫でる。

心臓の動悸が早くなる。ドクドクと、体中から響いているみたいだ。

お互いの胸がくつついて、圭子の鼓動が伝わってくる。彼女の動悸も早くなっていた。

荒くなった圭子の吐息が間近に聞こえる。

「け、結構マジになってないですかね、圭子さん」

「飯の体だし、孕んだって大丈夫だろう」

「大丈夫じゃなくね? 赤ん坊の命を無駄にしたら、多分、地獄に

落とされるぞ」

「ゼウスのせいになればいい」

「それこそ本当に地獄に落とされると思うんだが」

「もう、無駄話はいいいよ」

圭子の口調が、いつもの男口調から変わった。女の子の、弾んだような声になっている。

「するの？　しないの？」

人格が入れ変わったかのように、圭子の顔は女の子のそれと変わらない物になっていた。

「し、しないけど」

「なぜ？」

女の子の体になると、ここまで変わるのか？　いや、むしろコイツの人格が、今の女の子の人格に弾き飛ばされたようにも感じる。

冷静になれ、俺。目の前の美少女は、元は俺と同じ男だ。そのうえ、友人だ。だから、止めさせるんだ。

だんだん、圭子の顔が近づいてくる。唇までの距離が、どんどん縮まっていく。

「やめろよ、圭吾……」

声を震わせながらも、なんとか言葉を絞り出した。

「圭吾じゃないよ。圭子だよ」

本当にそうなのかもしれない。

この美少女は、圭吾を装った圭子だという可能性もある。
それでも。

「圭吾を、返せよ」

「どういうこと？」

「圭吾はこんなことはしない！ 長年一緒にいたから分かる！ お前は誰だ！？」

勢いあまって叫ぶと、圭子はひどく悲しそうな表情をして、俺から離れた。

内心ホツとした気持ちと、さっきのはなんだったんだろうという疑問が頭の中に渦巻いている。

圭子が頭を下げた。

「ごめんな…… 広太」

「け、圭吾？」

「ごめん……」

「……謝るのは、もういいんだ。それよりも、さっきの……」

「ははっ、おかしいよな。男だった頃は、広太のことは友人としか見てなかったのにさ。女の体になったら、妙にお前のことが気になりだして……」

「じゃあ、さっきのって？」

「飯の体だし、広太ならいいかな、とか思っただけなんだ」

「そう……なのか」

圭子は唇を強く噛んでいた。何か、我慢をしているかのように。ふと、圭子がゆっくりと顔を上げた。

「一つ、いいか？」

「なんだよ……」

「オレと、キスしてほしい」
「はあ!？」

圭子は自分の胸に手を置き、俺の目を真っ直ぐ見て言う。

「変な気分がおさまらないんだよ。でも、お前としたら、おさまる気がして……」

「ほ、ホモの趣味はないぞ？」

容姿は美少女だが。

「だよな……おかしいよな、今日のオレ」

「きつと、のぼせてんだよ……多分」

「……水でも浴びて、頭冷やしてくるわ」

圭子は湯船から上がって、手近にあるシャワーを浴びた。

「ひゃっ」

冷水を浴びて、小さな悲鳴をあげつつも、圭子はひたすらに水を浴び続けている。

「なに見てんだよ……」

圭子が、やや涙声になった声で言った。
言われて気づいた。俺が、彼女をじっと見つめていたことに。

「す、すまん」

慌てて目を逸らす。

気まずい雰囲気が出て、俺は立ち上がった。

「オレの横来い」

圭子が、空いたイスをポンポンと叩く。

出来るだけ圭子の体を視界に入れないように歩く。

「……別に、裸ぐらい見てもいいんだけどな」

ボソツ、と圭子が呟く。

「そういうワケにもいかないだろ」

圭子の隣に座って、シャワーの蛇口を捻った。

温度を調節して、体にかける。

「なあ、広太」

「ん？」

「正直に言えよ？ お前、オレの裸を見て興奮しただろ？」

「どうでしょうね」

「ごまかすなよ。固くなってたの、当たってたし」

「どこに？」

「言えない場所、とでも言おうか」

俺は肩を落とした。

やっちまったよ、なんかもう、いろいろと。

圭子は赤く染めた顔をこちらに向けた。

「どんな……感じだった？」

「……すまない。あの時は、迫ってきたお前に気が行きすぎて、そ

「こまで回らなかった」

「うわぁ。もうお前、チ。コ切り落とせよ」

「俺も女の子になろうかしらっ」

「キモいだけだから止める」

「圭吾じゃないよ圭子だよ」

「うおおお言うな！！ あれは、ほんの気の迷いなんだよ！！」

「俺の子供を孕んでもいいんだっ たっけえ？」

「止めてくれええ！！ほんと、マジで黒歴史だから！！」

「襲われてもいい、とかなんとか」

「こうなったらやむを得ない！ 貴様を、我が北斗新拳で倒さねばならないようだ」

「ならば、こっちは南斗だ！」

などとふざけていたら、お互いに足を滑らせて、お互いの頭をぶつけ合った。

「な、なかなかやるな、北斗新拳……」

「ふふ、そちらこそ……」

また足を滑らせて、再度頭をぶつけた。

さすがにもう止めた。

ヒリヒリする頭に苦悩しつつ、俺たちは体を洗い終え、脱衣場へと戻った。

「そういえば、圭子の服って、女の子っぽくないよな」

「確かに。袖が無い白いシャツに、下はジーパンだからな」

「下着も買ってないだろ？」

「気持ち悪いぐらいの気の利きようだな、お前。まあ、仮の体とはいえ、胸の形が悪くなったら気分悪いし」

「女の子みたいな服欲しいか？」

「うーん、せっかく女の子になったんだし、女装してみてもいいかも知れん」

「女の子なら女装とは言わなくね？」

「そりゃそうだ」

「ま、必要な物は次の町で買えばいいだろう」

「そうだな、そうしよう」

「下着は、俺が舐めたら渡すよ」

「キモッ!」

いつもの雰囲気に戻って、少し安心した。

いつまでもあんな風にいられたら、身が保たない。

暖簾をくぐって、俺たちは風呂場から出た。

これはエロゲではないが気の迷いでR18を超えそう

女子勢はまだ上がっていないらしく、俺と圭子は先に自分たちの部屋に戻った。

のだが、圭子が俺の部屋に入ってきた。

「大富豪やろうぜ」

「は？」

画面を開いた圭子は、ポンツとカードの束を取り出した。
どうやら、トランプをやるらしい。

「広太が勝ったらオレの処女を奪え。逆にオレが負けたらお前の童貞をもらうぜ」

「やる以外の選択肢が無いじゃねーか……」

「冗談だよ。お前が勝ったらオレとベロチュー。オレが勝ったらお前と濃厚なキスと」

「もうお前、元の姿に戻ってもホモとして生きていくんじゃないか？」

「バイだっけ？　パイだっけ？　それだよ、オレは」

「男女問わず愛せると」

「そういうこと」

それにしても、

「二人で大富豪って、つまらなくね？」

「そうか？　面白いと思うが」

まあいい。女子勢が帰ってくるまでの暇つぶしになるだろ。

始めてみたが、圭子はものすごく弱かった。

とにかく強いカードを出しとけばいいと思っているのか、最終的には弱いカードばかりが出てきた。

結果、俺の勝ち。

「あれれ……？ おつかしいなあ」

「よええよ……。ワザとか？」

「そうかもね。んじゃあ、改めまして」

圭子が四つん這いになって近づいてきた。本当にするつもりか？
もう同じ手は食わん。

「いてててて！！」

俺は圭子の頬をつねった。

「ひいいい！ やめれやめれ！」

「まだする気か？」

「あ、諦めん！」

頬をつねられながらも、圭子が顔を近づけてくる。
無駄だと言っておるうちに……。

突然、扉の開く音がして、俺は手を離してしまった。

「んぐっ！？」

「んっ」

「あ、あんた達……なにやってんの！？」

クリスだった。

圭子は、俺が手を離れたせいで、見事に俺の唇を奪った。事故だ。

お互いに唇を離さないまま（というか、驚きすぎて離すのを忘れていた）手をブンブン振って、「んー！　んー！」と声にならない否定を繰り返していた。

っていうか、地味に圭子の舌が入ってきてるんだが……。歯で噛んだら圭子は悲鳴をあげた。

怒りの表情でクリスが歩いてきて、俺と圭子を引き剥がす。

「やっぱり……、あんた達、カップルだったのね!？」

「誤解だ!」

「奥さんになってくれたとか、あたしの胸を揉んだりとか……」

「お、俺が愛しているのは君だけなんだ!」

土下座して謝る。

完全に、浮気現場を見られた姿だった。

「最低!」

「待て!　まあ話を聞け!　落ち着けクリス!　まだ何も終わっちゃいない!」

「あんたの人間性は終わってるわよ!」

汚物を見る目だ、あれは。

さて、どう説明したものか……。

「あのな、圭子は実は男なんだ!」

「ちゃんと女の子の体してるじゃない!」

「あー、なんと説明したらいいんだ!」

頭を抱えて考え込む。

すると、圭子がクリスの胸を掴んだ。

「なっ!？」

両手で揉みしだく百合シーンに、しばし呆然としながら眺めっていると、クリスが圭子の手をはじいた。

「な、なにすんのよ!」

「オレ男だから、女の子が好きなんだよ」

「はぁ? でも、さっきは広太様に……」

「ああ、あれ事故。クリスがいきなり扉を開けるもんだから、びっくりしてあんなことになっただけ」

「え……そうなの?」

「うん」

あれ? なんで納得してるの?

納得できる要素なんかほとんど無かった気がするのだが、クリスは俺の前まで来て、

「う、疑って、ごめんなさい」

「あ、ああ……うん」

え?

「……ってあれ?」

クリスが、圭子へ振り返った。

「……男?」

「ここに来る前、性別が変わっちゃったから」

「なら……お風呂の時間って……」

「うん。男湯にいたぜ?」

「ええ!？」

なぜかクリスに、俺の頬をぶっ叩かれた。

「一緒に入ってたの!？」

「そういうことだけど？」

「……怪しい」

「なにが？」

「男っていうのは嘘で、広太様に近づくための嘘なんじゃないの？」

半分くらい同意見だ。

ただ、起きた時に一緒だったことや、昔のことも覚えているあたり、別人という可能性はほとんど無いだろう。

「そんなことないけど」

「お風呂場で何かした？」

「別に？ 広太にまたがって喘いでただけだけど？」

え？ 半分くらい違うね？

「あ、喘いでたって……？」

「広太の太くて固いのが……オレの中に……」

「え、ええ!？」

またぶっ叩かれた。

「本当なの!？」

クリスが詰め寄ってきた。

「またがつて、までは合ってる」

「そ、そこからは？」

「俺が怒鳴ったらすぐに離れたよ。まだ童貞」

「そう……なの」

「安心したか？」

「まさかお風呂場でするほど性欲がある人間かと、疑っちゃったわ」
「ヒドい！」

顔を赤くしたクリスは、ぷいっと顔を逸らした。

圭子はいつの間にか部屋から消えていた。

「ほら、もういいだろ？」

「分かったわよ。着替えるから、あっち向いてて」

そう言うつと、クリスはクローゼットを開いて、パジャマを取り出した。

服を一枚一枚脱いでいき、下着だけになる。

「なんで見てんの！？」

「えっ？」

クリスがこちらを見て怒鳴ってきた。

何か、悪いことしたっけ？

「着替えてるのよ！」

「いいじゃん」

「あっち向いてよ！」

「嫌だよ」

「うう……！ もういい！」

怒ってしまったクリスは、すぐにパジャマに着替えた。服は綺麗に畳んで、隅っこに置いている。

入れ替わるように、次は俺がクローゼットからパジャマを取った。そして、クリスを見て言う。

「着替えるからあ、あっち向いてて!」

「真似しないでよ!」

うん、クリスの怒った表情に満足した。

さっさと服を脱ぎ捨てて、パンツも放り投げる。

「な、なんでそれまで脱いでんの!?!」

「だって、今日が初夜だろ?」

「しないわよ!」

「えっ……?」

肩を落とし、虚ろな瞳でクリスを見つめる。

「なんでそんなに落ち込んでんの?」

「き、今日こそは童貞捨てられると思ったのに……ぐすっ」

「な、泣かないでよ!」

「こうなったら、寝ているクリスのおっぱいを揉みたくしかないな」

「止めてよ!?!」

「また甘えてくれる? 昼間みたいに」

「はうっ!?!」

おかしな悲鳴をあげて、クリスは真っ赤になり、俯いてしまった。

「まあいいや。嫌がる姿見ても、遊びじゃなけりゃあ罪悪感が湧く

「ただだしな」

「嫌がるあたしを見て楽しいの!？」

「楽しいっつーか、可愛い」

「可愛い……って……」

クリスは一度上げた顔を、また下げてしまった。
パジャマのボタンを締めて、っと。よしオーケー。

「そう、その仕草だよ！ 恥ずかしがっているのが可愛い！」

「可愛い可愛いうるさいわよ！」

「可愛いんだから仕方ないだろ！」

「自重しなさい！」

「イヤだね！」

などと、三十分ぐらい続けていると、お互いに疲れてしまい、電気を消してベッドに寝ころんでいた。

自分のところまで伸びていた、クリスの長い髪をつまむ。

「なげえ」

「髪切る暇なんかなかったんだもん」

「ツインテールにしようぜ」

「どうしてよ」

「ツンデレはツインテールだって、相場が決まってる」

「で、街を破壊すればいいの？」

「ウルトラマンに出てくるツインテールじゃねえよ！」

「そうなの……」

なんだか、だんだんクリスが眠そうになってきている。
俺の腕を、コアラみたいに両手足を使って抱きついてきた。

「本……なんか読んでよ……」

「へ？」

「眠る前、いつも読み聞かされていたの」

「ああ、なるほど」

俺の家で本と言われても、漫画しかない。ラノベなんかもあるが、読むのがめんどうだ。

画像を開いて、自分の部屋にある私物を探す。

よし、コミケの同人で見つけたコレにしよう。

「『ああんお姉様……わたくしのっ……奥までっ……あなた様のチン』」

「ストップ！」

「え？　何かマズかった？」

「マズい点がありすぎるわよ！　なに読んでのよ！？」

「『ふ。なり姉妹の淫らな生活』という同人誌」

「どこからツツコンでいいか……」

「クリスちゃんもふ。なりですか！？」

「んなわけあるか！　もつと、ちゃんとしたのは無いの！？　全年齢対象で」

「わかったよ。じゃあ、小説読むけどいいな？」

「う、うん。……あんまり、難しい言葉は使わないでね？」

「わかったわかった」

えっと、なら、このラノベがいい。

僕と彼女は、また出会った。

三年離れていたただけだというのにまるで、何十年という歳月が経ってしまったように感じて、胸の奥がむずがゆくなる。

目頭が熱くなつて、僕は彼女の前まで歩いて行つた。
涙がこぼれないようにこらえつつ、彼女を見据える。

彼女もまた、僕に気づき、満面の笑みを向けた。ずっと探していたらしいことは、風の噂で知っていた。

僕も微笑み返した。

なんと可憐な女の子だろう。

髪は蜂蜜を浸したような金髪で、それがサラリと腰まで伸びている。

容姿は完璧だ。この世に二人として、彼女と同じ完璧な美少女はいないと確信できる。

僕は彼女に近づき、

その頭を、鉄棒で殴った。

絶叫が響く。血が吹いて、悲鳴がして、耳鳴りを起こしそうだ。

彼女は僕を、信じられないような目で見つめる。

彼女は僕を信頼していた。家族以上に、何よりも。

その僕が、彼女を殺すのだ。

これは復讐だ。

彼女の家は、僕の家族を殺した。

拳げ句に、生き残った僕を、執事にしたいなどと言ったのだ。

何度も泣いた。

親を殺し、妹を殺し、兄を殺した奴らのために働いているという

ことが、苦痛で仕方なかった。

だから、僕は逃げ出したんだ。

久しぶりに見つけた僕を見て、彼女はさぞ嬉しかっただろう。

でもね、僕は何にも嬉しくない。

彼女は僕に止めるよう懇願する。

その僕を馬鹿にしきった顔で言われても説得力などあるものか。
鉄棒を振り下ろして、腹を殴る。

骨が折れたのが、ぐしゃっという音と、鉄棒の感触から分かった。足りない。

振り下ろす。

腕に、足に、腹に、頭に。

楽には殺さない。

三年間。ずっと君を殺すために待ち続けてきたんだ。

これが僕の、君へ送る『愛』だ。

嬉しいか？ 愛した人に殺されて、嬉しいか！？

歡喜の笑いと、苦痛への悲鳴が共鳴して、美しい音色を奏でている。そこに鉄棒のドラムが重なって、曲となった。

僕は演奏家。人殺しの演奏家。

死ね。死ね。死ね。

彼女の腹から骨が突き出した時、血が僕の顔に飛び散った。

虚ろな瞳になった彼女を見て、笑う。きっと痛みも感じられないほどのだろう。

黄色い膿のような物が溢れてきて、内臓が覗けた。

醜い。可憐で完璧な彼女の姿とは思えないほど醜い。

こんな醜い“物”は、僕が叩き潰さないと。

ふと、彼女の唇が動いた。

「……て……る」

何を言っただ、これは。

ぜえぜえと荒い息を吐く彼女に、僕は耳を傾ける。

「愛して……る……」

その言葉がはっきりと聞き取れた瞬間、彼女はピクリとも動かなかった。

今更、もう遅いんだ。

僕は君が憎くてたまらなかった。いつだって、殺してやりたいと思ってた。

なのに……どうして涙が止まらないんだ？

忘れる。

鉄棒を、死体となつてしまった彼女に振り下ろす。

忘れる。

肉が潰れて、骨が折れる音だけが耳に入ってくる。

忘れる。

殴るたびに忘れるんだ。彼女の笑顔を。あの頃を。

「くそつ……くそつ……！」

彼女の体が原型を留めないほどに殴り潰して、ようやく僕は自分の気持ちに気づいた。

そうか。僕も愛していたのか。

憎しみに縛られ、決して見えなかった気持ち。

けれど、憎んでいたからこそ、この気持ちも一緒に覚えていた。

忘れられるわけがない。

死のう。彼女と一緒に。

僕は懷に持っていたナイフを取り出す。いざという時に使おうと思っていた物だ。

こんな形で使うことになるなんて。

僕は自分の心臓を、ナイフで突き刺した。

激痛と共に、視界が暗転する。どこが平行なのかも分からなくなってきた。

直に、僕は彼女のもとへ行ける。

ぼやけた視界の中に、彼女が手を差し伸べる姿が見えた。

僕は迷わず、彼女の手を掴む。

それから、僕は彼女と永遠に愛し合うことを誓い、目を閉じたのだ。

「眠れるかぁ!!」

「うおっ」

最後まで読み切ると、クリスが叫んだ。

「暗い! もっと明るいのはないの!？」

「そんなこと言いつつ、最後まで聞いてくれたじゃないか」

「彼女が自分の気持ちを告白したところから、どうやって止めれば
いいか分からなくなったのよ!」

「もっと前に止めるべき箇所はあったと思うが」

「それになによ!? 最初、久しぶりに出会った二人が結婚するの
かと思ったら、後からドンドン出てくる暗い設定!!」

無視ですか……。

この本はラノベ、というより短編集の一つだ。『憎しみゆえの愛』
という、早々にネタバレ気味なタイトルをしている。

「ハッピーエンドだろ? 結局、二人は両想いだっだし」

「違う! 二人が結婚して、子供を作らないとハッピーエンドじゃ
ない!」

「なら、今から俺とハッピーエンドになろうぜ!」

「うん!」

「おう!」

「って、んなわけないでしょ」

やっぱりそうですか。

「とにかく、もっと明るいもの無いの？」
「わかった。探してみる」

昔々、あるところに、ウサギの里がありました。

仲良く遊ぶウサギたちは、人間たちにも人気があり、子供とも仲良しでした。

ある日のことです。

キツネたちによって、仲間のウサギたちが食い殺されていました。それどころか、遊んでいた子供まで、喉笛を噛みきられ、腹を食いちぎられています。

ふと、背後に気配がありました。

ウサギは振り向く間もなく、背後にいたキツネによって、頭を丸呑みされました。

めでたしめでたし。

「めでたくない!!」

ちよつと涙目になっているクリスが、また叫んだ。

「これっぽっちもめでたくないわよ！　ウサギさんが可哀想じゃない！」

「う、ウサギさん……？」

ぷつ、と俺は吹き出した。

みるみるうちにクリスの顔が真っ赤になっていく。

「い、いいでしょ……、ウサギさんって言っても……」
「か、可愛い……」

「笑いながら言うな！」

「じ、じゃあ、キツネは？」

「き、キツネさん……」

「やべえ可愛い……」

褒めているが、俺は終始笑っぱなしである。

「もう寝る！」

「寝るんなら、せめて俺の腕を解放してくれ」

またコアラ抱きをされた。

「……あんたの話のせいで、怖くなったのよ」

「いっちょに、といれに、いってあげまちょーかー？」

「うざい！」

まだ離さない。

こうなったら、

「ううっ!？」

クリスと向かい合って寝てやる。

「こ、こっち見ないでよ……」

「美少女の顔を見ながら寝ると、寝覚めがいいらしい」

「そんな話、聞いたことないわよ……」

目線が泳いでいて、口がもごもごしたりして、とにかくクリスが小動物のような仕草をしてくれる。

多分、恥ずかしいからなのだろうが、あまりに可愛すぎて凝視してしまう。

「な、なんかあんだのここ、固いわね」
「は？」

クリスの膝が、俺の股間をツンツンとつついている。

「……ううん？」
「そこ、チ。コ」
「うええっ!？」

さっ、と膝を離された。

「な、なんで固く……」
「お前が抱きしめるせいでおっぱい当たってんだよ」
「興奮してんの？」
「生理的反応だよ」

興奮しているけどな。

「いいわよ……危害が無かったら、それくらい」
「そうかよ」
「それにしても、あんだの腕、思ったよりたくましいわね」
「ちよつと鍛えてるし」
「……へえ」

クリスが俺の腕に頬をあてて、目を閉じた。

このまま眠るのか。

これなら行ける！

クリスのファーストキス、貰った！！

「助けてくれええええええええええ！！」

いきなり扉が開いて、素っ裸のステアが入ってきた。大きな胸がダイナミックに揺れている。

そのまま俺たちのベッドに飛び込んで、俺に抱きついた。大きな胸の感触が、じかに伝わってくる。

開いた扉から、同じく素っ裸になった圭子が入ってきた。

「逃げられんぜえ、ステアちゃああん」

「く、くるなああ！！」

な、なにがどうなってるんだ！？

考える暇もなく、圭子が俺たちのベッドに上がり込んできて、俺は気を失った。

その点トツポってすげーよな、最後までチヨコたつぷりだもん

目が覚めた。

視界に光が差し、目を細める。どうやら朝らしい。

頭がガンガン響いて、痛い。二日酔いとは違う。頭を強くぶつけたみたいだった。

ふと、自分の右手が妙に重いを感じた。

「すう……すう……」

小さな寝息のする方へ目を向けると、クリスが俺の腕を、まだコアラ抱きしていた。
かなり顔が近い。

「広太あ……」

今度は逆の方向から、俺を呼ぶ声がした。
見ると、圭子だった。
素っ裸になって、俺の腕にしがみついている。

「なんだこれ」

なぜ圭子まで一緒に寝ているんだ？

そもそも、なんで裸なんだ？

ウンウンと唸っていると、やっと答えに辿り着いた。

そういえば昨日、コイツとステアが裸になって転がり込んできたんだった。

「おい、圭子」

肩を揺すって、起こそうとする。
が、圭子は、

「ちゅー……」

「お、うつ！？」

俺の頭を引き寄せて、無理やり唇を奪ってきた。
舌が入ってきて、絡んでくる。

「んー！ んー！」

必死に離そうとするが、微動だにしない。俺の口の中を貪って、
嬉しそうに笑っているだけだった。

絶対起きてるだろ、これ。

やっと圭子が唇を離してくれて、少し距離をとる。

「お、起きてんだろ？」

「にゃあ……もつとお……」

圭子が俺のズボンに手を掛けようとしたところで、俺は跳ね飛んだ。
だ。

寝相が悪いどころのレベルじゃねえ……。

未だに圭子は、俺のズボンを掴もうと空中に手を伸ばしている。

「間一髪……」

さんざん迷っていた圭子の手が、眠っているクリスへと伸びた。
慌ててクリスを抱いて、離す。
なにしか分からん……。。

「んう？」

俺に抱きしめられているクリスが、半開きになった目で、こちらを見た。

そして、なんの予兆もなく顔を寄せてきた。
頭を横に傾けて、すばやく回避する。

「ど、どうしたんだよ……」

「えへへえ……広太様あ……」

頬が火照り、目もトロンとしているクリスが、イタズラっぽく笑った。

だが、そこまでで、すぐに俺の胸に顔をうずめて、寝息をたて始めた。

「な、なんなんだ……？」

小さな子供みたいになったクリスを撫でる。髪はサラサラしていて、ずっと触っていたくなる。

「はあ……。とりあえず、圭子をどかさないとな」

素っ裸になつて、純情な男の子が見てはいけない物までさらけ出している圭子を見て、俺はため息を吐いた。
だけど、どうしようか。

クリスは俺から体を離さないし……、このままじゃあ圭子も起こせない。

「あ、そうか。クリスをどこかで寝させればいいのか」

そうと決まれば行動だ。

部屋から出て、ステアの部屋に入る。

中では、パジャマの胸元を全開にして、谷間が見えている色っぽい姿のステアが眠っていた。

なぜ誰も毛布をかぶりたがらない。

とにかく、今はクリスを寝かせるのが優先だ。

ステアの横に寝かせて、そのまま部屋を出る。

「さて、どうしたもんか」

圭子は裸で眠っている。

ただ、ふらふらと空中を掴む手が怖い。

ゆっくりと近づいて、肩を掴んだ。

と同時に、圭子に抱き寄せられる。

「うおっ!？」

首に両腕を巻きつけられ、足で背中をホールドされている。逃がす気は無いようだ。

このまま持っていこう……もうなんでもいいや。

圭子の可愛い寝顔を超至近距離で見つつ、部屋を出た。

もう一度、ステアたちの部屋の扉を開けると、クリスがステアの胸を鷲掴みにしていた。

「なにしてんだ」

俺の声に気づいたクリスが、こちらを振り向いた。

やはり、顔が寝ぼけたまま。

テコでも離れなさそうな圭子を抱きつつ、クリスたちのベッドに

近づく。

「あたしも……抱っこお……」

クリスが両手を伸ばして、甘えてきた。

抱っこしてやりたいのは山々だが、圭子が離れてくれない。
今すぐ、甘えん坊モードのクリスを抱きしめたいというのに。

「広太様あ……抱っこ、抱っこお……うっ……」

だんだん、不機嫌になってきた。

にしても、様子が本当におかしいな。

いつもとはまるで違っていて、人格ごとこっそりと入れ替わった
ような……。

言うなれば、今の圭子だ。普段のコイツは、単純に女の子が好き
なのに、今は俺にキスを迫っている。

「今はコイツだ」

圭子はどうやったら離れるのか。

胸揉んどくか。

「ひあっ!？」

揉んだ途端に圭子は飛び上がって、俺から離れた。

案外、あっさりだった。

「ほらほら、おいでおいで」

クリスに手招きすると、彼女は嬉しそうに胸に飛び込んできた。

やはり、何かおかしい。

かなり勝手なのだが、俺はこれに、ある仮定をしていた。

「なあ、クリス」

「なあに？ 広太様あ」

「お前の歳って、いくつだ」

そんなもの、見れば分かるぐらいだ。

身長から考えて、高校生ぐらいだろう。

だが、クリスは、

「あたしね、十歳！」

思っていた通りだった。

記憶を共有しつつあるが、本人は気づかない。

なぜこうなったかも、俺には分からない。

ただ一つ分かるのは、

「多重人格か……」

ハゲはストレスが原因というのがストレスはハゲが原因だったりする（前書き）

タイトルに作意的な物はない。

ただ純粹に「ハゲたくねえ」と思っただけ

ハゲはストレスが原因というのがストレスはハゲが原因だったりする

我らのパーティーメンバーが目覚まし始めた。

どいつもこいつも寝起きが良いらしく、笑顔で俺たちのいる部屋へと入ってきた。

そこで、彼女らは驚くべき物を見た、というような表情が波を立てているだろう。

クリスが、俺の膝の上で大人しく座っているのだ。

「さて、まずはこのロリクリスについて話そうか」

「なんかキング。ム　ハーツの？？機関に出てきそうな名前ですね」

シイちゃんが眉根を寄せつつ言った。

なるほど、確かに文字にしてみればそうだが、マジで夢の国の奴らが俺たちを消しかかってきそうさ。

別に、俺はクリスが多重人格だと確信したわけではない。今の彼女は、単純に誰かに甘えるために作った仮の姿なのかもしれないことは頭の片隅に置いてあった。

いや、たくさんのアニメやラノベを見てきた俺が推測するに、もしかしたらさっきの仮説は正しいのかも。

「クリスは、王国が潰れて、大きなストレスを抱えていた。そこで、奴隷商人にでも捕まったのだろう。一年も檻の中にいたら精神がぶっ壊れて当たり前だ。」

だからクリスは、話し相手を作った。自分という話し相手をな。人格を複数作り、脳内で会話させることで自我を保ってきたのだろう。

逆にそれが徒となった。今の彼女は人格が固定されていない。で、今のクリスだ。とにかく誰かに甘えたがる人格になっている。

過程なしにな。親を失った悲しみから来たものなのだろうと推測する。

まだ出てきていない人格もいるハズだ。いや、これから先、一度も出てこない者もいるはず。それほど、クリスはぶっ壊れている。どれが主人格なんか、俺には見当もつかない」

よくもまあ、俺は一字一句噛まないで言えたものだ。これだけの滑舌があれば、論文でも出して学会で大々的に発表すればいいのに。真摯に聞いてくれたみんなは、一様に訝しんだ。

「多重人格。厄介だな」

すでに着替え終わった圭子が、顎に人差し指をあてて呟いた。俺はその呟きに、同意の声をあげる。

「厄介きわまりない。全ては本人と時間に任せるしかないからな。俺たちが手伝えるのは、クリスの精神を壊さないことだけだ」

「なあ、広太様？」

「どうした、ステア」

「どうして、そんなに多重人格について知っている、いや、考えているんだ？ 広太様のことだから、私たちのように混乱して、クリスに問いただしているだろうに」

「言ってなかったっけか」

「……？」

「俺ってば、昔は多重人格だったんだよ」

「なっ……」

ステアの顔中に驚きが広がっていく。

「ある程度の知識はある。あの頃は、なぜ多重人格になったかは分

からない。いじめとか、ストレスの溜まるイベントも無かったしな。家族関係でもなく、ただ、単純に、多重人格になってしまったただだ」

そう。

あれは突発的なことだった。

気づけば、日にちが多めに進んでいた、

知らない間に、俺はたくさんのことをしていた。

漫画を買い込んでいたり、ピクシブにど下手な絵を投稿していたり、女子のスカートをめくったり女子のスカートをめくったり女子のスカートをめくったり。

まあ、こんなところか。

「クリスの多重人格の治し方は知らない。だからこのまま放置する」

「む、無責任な！」

「無責任？ ステア、お前は、お前じゃなくなり、そこを他人に介入された時の苛立ちを知らないな？」

「し、知っているさ……」

「ほう？ どんな時だ？」

意地悪く、ステアに問いかける。

彼女は口を紡ごうか迷っているようだった。話すべきかどうか、というところだろう。

やがて決心したらしく、真っ直ぐに俺を見た。

「私は、記憶喪失だ」

その言葉に、頭を殴られたような衝撃が襲った。

「目が覚めたら、すでに奴隷だった。それまでの経緯も知らない」

「……なるほど。で、誰に介入されたって？」

聞かなくても分かる。

「広太様たちだ」

「そうか。いつまで苛立ってた？」

「最初から、多分、今まで」

「多分？　今まで？」

「あなたたちも同じ境遇だったと知ると、妙な親近感が湧いてきたんだ」

「ふーん」

次に、シイちゃんに目を向けた。

彼女はビクツと体を震わせる。

「何か隠してること、あるでしょ？」

「な、何もありません！」

いや、もう二人もイベントが施されていたんだ。今更、こんな何かありげな格好の少女が、何もイベントが用意されていないハズがない。

「いや、あるだろ？　例えば、能力者との戦いをしてるとか。終わらないデスゲームの参加者とか。気がついたら君はポケモンになっていたとか」

「最後、不思議なダンジョンじゃないですか」

「ラストで、パートナーが主人公との別れを惜しむシーンは泣ける」

「ですよー、って違いますよ！」

「へ？」

「だから、シイは何もないんです！　本当に、本当に！」

「その眼帯は？」

「あ、その、これ……」

怪しい。

近づく、シイちゃんは俺を避けて、逃げた。

切羽詰まっているみたいで、小動物を追いかけている気分になった。ハムスターを指でいじるみたいな。

ステン、とシイちゃんは仰向けに倒れてしまった。

一気に飛びかかる。

「ええい、往生せい！」

「ひいっ！ 眼帯だけは、眼帯だけはあ！」

シイちゃんの上に馬乗りになって、眼帯を取ろうと手を伸ばす。

彼女は必死に抵抗する。

爪が頬をかすって、血がにじんだ。彼女の片目には、明らかな恐怖と怯えがあつて、尋常ではないことが窺えた。

でも、好奇心が勝っていた。眼帯の紐を掴む。

「おらっ！」

引きちぎった。

眼帯が取れて、その奥にある瞳が露わになった。

「えっ？」

「あう……、だから、止めてって言ったのに……」

彼女の、閉じ込められた瞳は、真っ赤に染まっていた。

黒目のところが、ルビーのような潤沢な色をしていて、吸い込まれそうになる。瞳孔はなく、どこを見ているかも分からない。

シイちゃんは眉間にシワを寄せて、敵意の眼差しで俺を睨んだ。
彼女はその目を片手で覆って、俺を突き飛ばした。

「離れてよ！」

声がうわずつていた。普段の彼女とは思えないほど、荒れている。
指の隙間から見える赤い瞳はメラメラと燃えているみたいで、ぞ
っとしない。

シイちゃんは立ち上がって、定まらない視線で叫ぶ。

「また、シイを馬鹿にするんでしょ！ みんな、みんな！ シイを
指差して笑うんだ！ おかしな奴だって、悪魔の子供だって！ き
つとあなたたちもそうよ！ あの死に損ないの死者たちに内臓をか
き回されながら聞いた言葉なんか、大嫌い！！

もういい加減死にたいよ！ でも、死ねない！ 誰かが先にゴー
ルしてしまうんだ！ シイはいつまで経っても死ねないまま！！
だから奴隷になったんだ！ これなら死なないって！ 首を切り
落とされることも、内臓をかき回されることも、舌を引き抜かれる
こともない！

信じてた人に裏切られて、シイはどうすればいいの！？ もうイ
ヤ！ みんな死んじゃえ！！」

感情の波が、ダムのように秘められていたシイちゃんの全てを掻
き出していた。

表だって見えていた彼女とは、全く正反対の顔だ。

彼女はボロボロと涙を流して、絶叫する。

「自分の欲望しか頭に無いんだよ！ シイを殺したくせに、違う誰
かに殺されてて！

また不気味に笑うんだ！ 『また会ったね』って！

女の子の大切な物を奪っておいで、平気な顔をしてるんだよ、アイツは！！」

「落ち着け、シイちゃん！」

頭をかきむしるシイちゃんを、俺は強く抱きしめた。これ以上、暴れないように。

「離して、離してよぉ！」

「どうしたんだよ！！！」

俺以外の全員が絶句し、固まっていた。

「殺さなくちゃ、殺さなくちゃ！ じゃないとシイは、シイは死ねないんだよ！」

「なに言ってるかわかんねえよ！！！」

「死なせて！ 死なせて！ もう痛いのは嫌、いやいや嫌ぁ！！！」

はじめたように圭子もシイちゃんを抱きしめる。

それでも、まだシイちゃんは暴れ続ける。

何か、俺は開いてはいけない物を開いてしまったのか？

俺のほんのちよつとの好奇心が、今、彼女を苦しませている。いつたい、彼女はどんな思いで眼帯をしていたんだ。

ふと、もう一人、彼女を抱きしめる人がいた。

「こわがらないでよう」

破壊神だった。

破壊神は、シイの足に抱きついて離れない。どれだけ揺さぶられても、手を離さない。

「おねがい、シイオネーちゃん……」

破壊神の諭すような声で、シイは膝から崩れ落ちた。
赤い瞳から、血のごとく赤い涙が流れている。

「ごめん……なさい。シイは、シイは……」

「シイちゃん？」

「シイは、本当は人前に出ちゃいけないぐらい醜いの……。体は外
も中もぐちゃぐちゃで、赤くて白くて黒くて、何がなんだか分から
ないの……。」

抱きしめてくれた人だって、シイを裏切って……。もう、閉じ込
めるしかなかったんだよ……。

この目がある限り、シイは『終わらないデスゲーム』からは抜け
られない……」

終わらないデスゲーム？

それって、俺が言ってた……。

「んぐっ！」

頭が……痛い。

内側から、ハンマーで殴られているみたいだ。

「どうした、広太!？」

圭子が駆け寄ってきて、俺の体を支える。

色んなことが、俺の記憶を埋め尽くしていた。

……俺は、どうしてクリスが多重人格だと分かった？

……俺は、どうしてステアが記憶喪失だと聞いて、空虚な心のま

まだった？

……俺は、どうして『終わらないデスゲーム』を知っていた？
どうして、シイちゃんから無理やり眼帯をひったくった？

「なるほど……ゼウスの野郎、面白い物を与えてくれたもんだ……」

あまりにもサラッと言われたせいで、俺は忘れていた。

「……うん、別にゲームの歴史変わろうと知ったこっちゃないし
ね。」

普通、どれだけ主人公が強かるうが、歴史は変わらない。
つまり、アイツは俺に、このゲームの歴史を変えろと言っていた
のだ。

なら、何が正規ルートなんだ？

「……もともと、シイは死ぬためのキャラクターだ。」

ふと、誰かの声がした。

「……彼女は、本当のストーリーでは、主人公たちに殺されるはずだ。とある、男の手によって、主人公たちはシイを殺すよう誘導される。」

頭の中で、これから起こるストーリーが復唱される。

その正規ルートを潰せばいいのか？

だけど、主人公である俺たちは、シイと仲間だ。これで、一つル
ートが潰れたことになる。

「なるほどねえ。シイちゃん、君は、グリッドという男のせいで、

みんなに裏切られて、殺されている」

「な、なんでっ……」

「なら、なぜ生きているのか。それは終わらないデスゲームというタイトルが全てを物語っている」

最後に生き残った人間が、デスゲームから抜けられる。

赤い瞳は参加者の証。

モンスター、マンティコアの特徴の一つだ。

だから、参加者は忌み嫌われる。

施設の利用も不可能。

これが、終わらないデスゲームのルール。

体験してもいないことを、続々と思い出していく。

「そう。シイは何度も死んでるよ」

「だから、誰かを虜とらにして、忌み嫌われながらも平凡に暮らせたら
と思ったのか？」

「そうだよ。死ねば、体がゲーム参加前に戻るっていうのは、本当に好都合だね。痛みは最初と変わらず感じるし、血も流れる。みんながみんな、シイは初めてなんだと誤解してくれたよ。本当は、何
度もしているのにね。」

でもね、いっつも死ぬんだ。いっつも裏切るんだ。グリッドが、
シイの邪魔をするんだ。『君は綺麗な姿をしていて、体のどこも汚
れていない。けれど、心は垢で真っ黒』だとか言って、殺すんだ」
「……」

「アイツさえいなければ、シイはもっと綺麗でいられた。もう、何
もしたくないよ。汚い物を舐めて、入れて、外から中まで汚れるの
は、もうこりごりだよ……」

「そっか。で、全部、吐き出せたかい？」

「……うん」

「最後に聞かせてくれ。終わらないデスゲームは、今何周目だ。そ

れに、参加者の数は？」

「……80周目。ももとの参加者が百人いたから、もう二十人くらいしかないんじゃないかな」

「それだけなら余裕だな」

シイの肩を掴んで、笑顔を向けた。

「今回は真っ先に、シイちゃんをゲームから抜け出させてやる」

「……無理だよ」

「無理じゃない。シイちゃんを綺麗なまま、ゲームから抜け出させてやるんだ。垢なんて落としてしまえばいい。」

体は元通りなんだろ？　なら、今度は本当に大切な人のためにすればいい。

「……まあ、そういうことだ」

何が言いたかったか、自分でもよく分からなかった。

恥ずかしくて目を逸らしてしまった。

けれど、

「ありがと、広太様」

シイちゃんが、そう呟いて、俺に抱きついた。

「……やっぱりぺったんこだなあ。」

シイちゃんが俺の胸に顔をうずめて、すりすりと頬ずりする。

「……初めては、広太様がいいなあ」

「へ、変なこと言っなよ……」

「そだね。まだ、救われてもいないしね」

えへへ、とシイちゃんは笑った。

オッドアイの両目が、俺の目を見た。

「大好きだよ……」

「そうかい」

フラグなんて、いつ立たせたかな、とか考えていると、シィちゃんはずうすと寝息をたて始めた。
眠ってる。

「んじゃ、そろそろ行こうか」

シィちゃんをおぶって、立ち上がる。

「広太様あ、あたしもだっこお」

クリスが座ったまま、手を伸ばしてきた。
あいにく、満員です。

「圭子、クリスをおぶってくれ」

「あ、うん、いいけど」

圭子はクリスの前で腰を落とした。
クリスはブーブー言いつつも、体を預ける。

「さて、行きますか」

「わたしもおんぶしてほしいよう！」

ぴよんぴよんと、破壊神が跳ねている。

「じゃあ、私の背中に乗るといい」

「ステア、いいの？」

「ああ、手は空いていたしな」

破壊神は、ステアがおぶった。

三人が三人をおぶってるって、どんな状況だ。

そのまま一階に降りると、宿屋のおばちゃんが出迎えてくれた。

「昨晚はお楽しみでしたねえ」

殺すぞクソババア。

何も楽しくなかったぞ。

平静を装いつつ、俺たちは宿屋から出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0941ba/>

転生でチートと化した俺が女体化した友人とゲームの世界で奴隷(+ 幼女)ハー

2012年1月13日23時49分発行